
ASKED RIDER'S PEACH MOON STORY ANOTHER -空我-

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M A S K E D R I D E R ・ S P E A C H M O O N S T O
R Y A N O T H E R - 空我 -

【Nコード】

N 4 7 0 0 I

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

桃月第三小学校…急遽、5年2組の担任をすることになった教師・神原真護、パツと見には『冴えない』とか、『頼りない』とか言われてるが…彼は実は『普通』の先生ではなく…

1 - 神原真護 - (前書き)

どうも皆様、柳雨という者です。この小説は私が連載している『M
A S K E D R I D E R ' S P E A C H M O O N S T O R Y 』
の番外編小説です。他の小説も連載中のため短期集中 + 不定期連載
という形になります。

1 - 神原真護 -

- 桃月第三小学校。

- 5年2組教室。

「麻生先生遅いね、もうすぐ授業なのに…。」

- 髪を二つに結んだ女子・鈴原未来^{すずはら・みらい}は担任・麻生真尋^{あそつ・まひろ}が授業時間になっても教室に來ないことを不安に思っていた。

「うん…どうしたんだろ…？」

- ショートの銀髪、ノートで顔を隠して赤くなっている、いかにも恥ずかしがりやな女子・犬神雅^{いぬがみ・みやび}もこれにはおかしく感じていた。

「ん…、寝坊とか？」

- おさげに黒い瞳、活発そうな印象の女子・一条望^{いちじょう・のぞみ}はそんなことを言った。

「の、望ちゃん！いくら先生でも…。」

「いやいや…解らないよ？雅ちゃん。だって麻生先生のことだし」。

「う…。」

- 雅は反論するが望の言うことには一理あった。

・麻生真尋という女性は生徒達に優しく、人懐っこく、『天使』の様だとまで言われてるが反面、天然でのんびり…飯に遅刻したとしても不思議はないくらいだった。

「そのへんで捨てネコとかとじゃれてたりして…子供っぽいところもあるしね、プヒヒヒッ！」

・望は独特の笑い声を上げてテンションが高くなる。

「望ちゃん、言い過ぎだよ…」

・雅はそんな望を見てオロオロとろたえた。

「でもどうしたのかな…。」

・未来は二人のやり取りを見ながらも真尋の心配をすると『ガラッ』と戸が開かれる。

「先生…？」・しかし真尋ではなく、やって来たのは若く、パツと見には冴えなさそうな感じの黒いスーツの男性だった…。そして右腕に出席簿を抱えていた。

「あゝ…その、5年2組ってここかな？」

・男性は頭をポリポリ掻きながら近場にいた未来達に話しかける。

「は、はい…そうですが…？」

「ん、そうか。」

・おずおずと未来が答えると男性は教壇についてクラス全員に話を始めた。

「えーっと、5年2組の皆さんに残念なお知らせがあります…今朝、麻生先生が交通事故に逢いました。」

「『ええッ!?!』」

・小学生の彼等が知るにはあまりにもショッキングなことだった。

「あ、いや…そんな大袈裟なものじゃなくて、軽いんだけど、全治三週間です。」

「よ、良かった…。」

・この一言で全員がホッとする。

「あ、それで麻生先生の代わりに、俺がしばらくこのクラスを担任することになりました…。」

・男性は黒板にサラッと自分の名前をチョークで書き上げる。「かん神原真護マコトです。よろしく願いますッ!」

「おおー!」

「よろしく願いますー!」

・最初は動揺したものの、持ち前の明るさですぐさま生徒達は立ち直る。代わりの先生ということだが彼等はいたくテンションが上が

っていた。

「へっ、ちょっと頼りなさそうだけど… イイ感じの先生だね。雅ちゃん。未来ちゃん。」

「え！？そ…それは、その…。」

「え、ええと…。」

・望に話題を振られて、二人は顔を赤らめてしまう。

「んん？雅ちゃんは恥ずかしがりやだからともかく、未来ちゃんまで顔赤くして…。もしかしてタイプ？プヒヒヒッ。」

「の、望ちゃん！？」

・望が笑いながら冗談を飛ばすと、未来はより一層顔を赤くする…。

「はいはい、その三人。静かにな、質問タイムは設けるから。」

「はい！」

「「う、ごめんなさいッ！」「」」

・真護が注意すると『ドッ』とクラス中が笑いだす。

（にぎやかで良いクラスじゃないか、麻生先生が言ってた通りだ。）

・真護は心の中で今朝、病院で会った真尋のことを思い出していた。
・時はさかのぼり、桃月病院。

「じゃあ、5年2組の皆さんをおまかせしますね。頑張ってください。神原先生。」

「あ、はい！」

・髪を後ろに結び、おっとりした感じの優しい表情の女性…麻生真尋は笑顔で言う。

（ど、どうしよう…。）

・真護は緊張していた。真尋の代わりにクラスを受け持つこともそうだが、彼女から期待されたことにより、プレッシャーを感じた。

「大丈夫です…緊張しなくても良いんですよ？」

（！？）

・真護は動揺した。ズバリ凶星だったからだ。

「焦らず、ゆっくりで良いんです…あの子達ならきつと神原先生を受け入れてくれますよ。皆、明るくてとても良い子達なんです。」

「は…はい！」

・真護は力強く、自信をもって彼女に応えた。…そんなことがあったため、今はこうしてちゃんと生徒達と接することが出来ていた。

「さて…質問タイムだけど、ん？」

ふと、真護は我が目を疑った…。

「…。」

「…。」

・物陰から陰鬱そうな、暗い雰囲気幽霊の様な少女がジッと真護を見ていた…。

「あ、あれは俺にしか見えない女の子かい…？」

「このクラスの高浜さんです。」

「…。」

（本当にこのクラスでやってけるのかな…俺？）

・真護は高浜という女子生徒の異様な存在感によって、再び不安を感じたという…。・その頃。とある山奥…。

・地面から突如、『ボコツ』と、無数の腕が生えて『何か』が地中から這い出てくる。

『ジガチガザバ…！ヂジヨグパ…！！（久々だな…！地上は…！）』

『

・未知の言語を発しながらその異形達は大地にしっかりと立つ。

『ゲゲル、ボセジュシバギグス…！（これより『ゲゲル』を開始する…！）』

『ギエエエエアアアッ！！！！』

- 獣の様な咆哮を上げて、異形達は人里を目指して行進を始める…。

- さらに宇宙では…。

『見えたぞ…地球だ。』

『我々の手にかかれば地球人など恐るるに足らん！行くぞ！』

『オオオオオオオオッ！！！！』

- 宇宙からの様々な侵略者達が地球を狙って次々飛来して来たのだ…。

- 真護達の知らない場所で、桃月町…そして地球全体に未曾有の危機が刻一刻と迫ろうとしていた…。

1 - 神原真護 - (後書き)

今回は授業などの日常編です。グロウギや謎の宇宙勢力に関してはまだまだ出ませんが…お楽しみに。

2・日常と戦い・（前書き）

今回は質問や授業などの日常編です。

2・日常と戦い・

「よし、じゃあ質問タイム。何か聞きたいことあるかい？」

「はい！はい！はい！」

・5年2組の皆は真護へ質問するため思い切り手を上げる。

「よし、じゃあそこのおさげの子。」

「はい、一条望と言います！質問なんですけど…ぶつちゃけ神原先生、好きな女性のタイプって何ですか？」

「ぶつ！？な、なんつう質問してんだ、いきなり…！」

・『好みの女性のタイプ』…こんな質問が来るなど思わなかったただろっ…真護は焦る。

「望ちゃん！デリカシー無さ過ぎだよ…！」

・雅は望のよくありがちでふざけた質問に対して突っ込むが…。

「良いじゃん！それに未来ちゃんも気にならない？プヒヒヒ。」

（な、なんで私に振るのッ！？）

・未来は顔を赤くして黙ってしまっう。

「…ええと、好きなタイプ？んー…なんていうか、おしとやかで優しげな人かな…押しが強いタイプとかは…ちよつと苦手だな。あと煙草吸うようなのは全力で遠慮する。」

「へー、じゃあ麻生先生とか？」

・真護はガンツ！と教壇に頭をぶつける。

「いや…確かにキレイな先生だとは思っけど…。んん…」

「じゃあこのクラスにいますか？」

・またまた望のともでもない発言にガンツ！と頭をぶつける真護。

・何故か未来はジツと真護を見て赤くなってるが、それを真護本人が知る由も無い…。

「あのな！俺は一応先生だから！生徒に好きなタイプいるとか言ったら色々問題起きるから！！そういう質問もうダメッ！良いね！？」

「ちえー、ノリ悪いな〜。」

・望はムスツと頬を膨れさせる。

（この一条って娘、なんだか苦手だ…。）

・溜息つきながら真護は望への苦手意識が芽生えたという。

「んじゃ、次は…そのノートの子。」

「の、ノート？あ、あの…犬神雅と言います。先生は動物は好きですか…？」

・指名されたのが恥かしいのか、雅は赤くなった顔をノートで隠し、かすめる様な弱々しい、小さな声で雅が質問をする。

「動物？んゝ、動物は好きだな。ちなみに犬か猫かならば猫だな、見えていて和むし、可愛いからな。」

「そ…そうですか。」

・雅は真護の返答に嬉しそうにはにかむ様に笑う。

（内気そうだけど優しい娘なんだ。しかしよく一条の友達になれたな…。）

・元気過ぎる望と対照的に大人し過ぎる雅を見て真護は内心、そう思ったという…。その後、質問がしばらくいくつか出た。

「先生の好きな食べ物？」

「好きなのは卵料理全般、嫌いなのは牛乳。」

「5年2組をどう思いますか？」

「全体的に明るくてにぎやかだと思います、麻生先生も御墨つきです。」

「今ハマってることはなんですか？」

「今はバイクと登山かな？」

・等々…質問があり、いよいよ次で最後になった。

「じゃあ最後に…誰かいないかい？」

「は…はい！」

「んじゃ、君。」

「す…鈴原未来です！あの…ええと…5年2組は好きですか！？」

・テンパってるのか、顔がトマトの様に赤くなり、未来は自分でも訳の解らない質問をしてしまうが…。

「勿論！短い間だけどよろしくな、鈴原！」

「…！！」

・自信満々で言う真護に未来は恥ずかしさのあまり顔を伏せてしまふ。

・こんな感じで質問タイムは終わり、次は体育の時間になった。

「最初にマラソンやって残りはドッチボールにするか？」

・ジャージに着替えた真護は校庭に並んだ生徒達にそう言つと『ワイッ！』と、喜ばれた。

「よし、じゃあ始めッ。無理せず自分のペースで良いからな。」

「……はい!!」

生徒達は元氣良く応えると、早速それぞれのペースで走り出す。

(平和だな…あの頃の時間が噓みたいだ。)

・真護は物憂げに遠い空を見つめて思う…。

・誰かの笑顔のために『戦って』きた『あの日々』は決して無駄では無かったし、また、臨時とはいえ、教師という仕事にも誇りを持っている。

(先生…?)

・この時の真護の様子を未来だけが気づいた時だった…

(…え?)

・突然、未来は意識が飛んで転倒…。

「未来ちゃん!？」

「鈴原!」

・すぐさま真護や望達が駆けつける。

「いたた…。」

・未来の膝から血が滲み出し、涙目になる…。

「これじゃ走るのは無理っぱいな…保健室行くか。」

「え？先生…キャッ!？」

- 真護は未来をヒョイツと背負い、保健室へ行こうとする。

「これから鈴原を保健室へ連れてくから、皆はマラソン各自にやっ
てるように。」

「「はい!」「」」

- それだけ言うと真護はすぐさま学校へ走ってしまった。

(んゝ、こりゃあ面白くなりそうだぞ、プヒヒヒ。)

「の、望ちゃん…何笑ってるの?」

- 一人怪しく笑う望に雅は震え上がる…。 - 保健室。

「こんな感じで良いだろ。」

- 真護は未来の足を消毒し、絆創膏も貼り付ける。

「あ、ありがとうございます。」

「ああ…後はゆっくり休んでおくと良い。」

- 真護はそれだけ言うと未来をベッドに寝かしつけてる。

「ごめんなさい…。」

「なんで謝るんだい？」

「私…今は大丈夫ですけど、元は病弱で学校に中々来れない時もあった…望ちゃん達や麻生先生にも、迷惑かけてばかりで…あの…その。」

・真護は一呼吸置いてからて未来に返事する。

「焦って無理する必要は無い、鈴原は鈴原でゆっくり頑張れば良いんだぞ？」

・未来の頭をワシワシと撫でてから真護は笑顔で応える。

「え…！？」

「ま、今は麻生先生からの受け売りだけだな。んじゃ。後で迎えに来るからゆつくり休んでおきな。」

「はい！」

・真護は振り返らずにサムズアップをして立ち去る…

（神原先生…。）

・未来はただただ赤い顔で真護の背中を見つめていた。・そして放課後。

「いやゝ、良いクラスだったなゝ」

・桃月町内…真護は愛車『ビートチェイサー』に乗りながら帰宅していた。

「明日も一丁頑張りますか！…ん？なんだ…！？」

・だが…その途中。真護は決してあつてはならない『存在』を見つけてしまう。

『ギベ！リント、ゾロパリバゴソギザ！（死ね！リント共は皆殺しだ！）』

「うわあああああ！」

「キヤアアアア！？」

・町中でピラニアに似た異形の怪物…否、グロンギのピラニア種怪人・メ・ビラン・ギが暴れていた。

「グロンギ！？バカな…オレが全員倒したはずだぞ！？」

・『グロンギ』…リント（人間）を『ゲゲル』と呼ばれる殺人ゲームで虐殺をする邪悪なる超古代の戦闘種族…。

「やれやれ…また戦うことになるなんてな…。」

・だが、そのグロンギは、かつて、ある一人の『戦士』によって封印されたという。

「…ハッ！」

・霊石『アマダム』を埋め込しベルト『アークル』を携え、その姿を変えて戦った…。

「…変身ッ！！」

『ガ…ガセパ！？（あ…アレは！？）』

・クワガタを思わせる金の角、赤き炎の様な眼と古代文字が彫られた赤い鎧…その名は、戦士・クウガ。

・現代におけるまたの呼び名を…『仮面ライダークウガ』。

2・日常と戦い・（後書き）

次回はクウガ対グロンギ…そして宇宙からの『尖兵』が姿を表わします

3 - 未知の敵 - (前書き)

グロンギとの戦いの途中、宇宙勢力の末端が姿を現わします

3 - 未知の敵 -

『セリヤアッ!』

『ガフツ!?!』

・クウガと化した真護はメ・ビラン・ギに殴りかかり、取っ組み合いになる。

『お前ら…また人間を殺す気か!?!』

『ガダシラゲザ! (当たり前だ!)』

『あいたツ!?!』

・ビランはクウガの左腕に噛みつく、ギザギザの歯が腕に食い込むが…。

『痛いだが!この魚野郎ッ!!!』

『ブゲツ!?!』

・怒ったクウガは右手で反撃として顔面を数発殴りつけてビランを引き離す。

『てめえ…お返しに三枚におろしてやるよ!』

・クウガはふと、近くのコミ捨て場にあったビール瓶を掴み、叩き割る。

『超変身ッ！』

・クウガは次の瞬間…紫の重厚な鎧に包まれ、眼も赤から紫へと変わる…赤のマイティフォームから紫のタイタンフォームへの変化が完了した。

・そしてビール瓶は大振りの大剣『タイタンソード』に変わる。

『おりゃあぁっ！！』

『ギガッ！ブギヤッ！？』

・クウガはタイタンソードでビランへ容赦無く斬撃を浴びせて、ビランの胸に刃を思いつ切り突き刺す。

『ハアアアア…ハッ！！』

『ギギヤアッ！？』

・突き刺した箇所から封印の刻印が浮かび上がり、タイタンソードの封印エネルギーが流れ込み、ビランは爆散する。

・必殺技『カラミティタイタン』が炸裂した瞬間であった…。

『やれやれ…。』

・ビランを倒して安心し切ったが…。

『ラザザ…クウガ！（まだだ…クウガ！）』

『…どわぁ！？もう一匹いたのかよ！！』

・いきなり空中から針の様なものが飛んできたがクウガはタイタンソードで全て叩き落とす。

・空中にいたもう一体のグロンギ…フクロウ種怪人ゴ・ブウロ・グが地上に降りる。

『ボソギデジャス…クウガ！（殺してやる…クウガ！）』

『…あつぶねえな！』

・タイタンソードを構えて再び臨戦態勢を取るクウガだったが…彼は気づかなかった。

・空からやって来たのがブウロ『だけ』ではないことを…。『ん？うわっ！上！上！』

『バプザ？（なんだ？）』

・クウガは御丁寧にブウロに危機を教えてやったが遅かった。

『グピエツ！？』

『あちゃー…教えてやったのに…』

・突如、空から巨大な物体が落下し、『グチャアッ！』というグロテスクな音を立ててブウロはペチャンコになってしまった。

『…なんだよアレ？』

- クウガはブウ口を下敷きにした謎の巨大な物体を見上げる…。

- クウガよりも遥かに巨大で機械的な身体…足は無いが長い両腕を持っており、全体的に丸く、ずんぐりとしたフォルム。そして顔は眼が二つあるだけのつぺりとしていた。

『うん、RPGでいえばゴーレムって感じだな、あのデカブツ。』

『…！』

- ゴーレム（仮名）はクウガの姿を確認するやいなや、その場から浮遊し、いきなり巨腕を振るい、クウガをブウ口のようにペチャンコにしようとしていた。

『わっ！？』

- 慌ててクウガはその場から離れる、ゴーレムの巨腕が地面に突き刺さると、立派なクレーターが出来上がってしまった。

『…なんて馬鹿力だよ！』

- クウガは正直ゾツとした…相手は不意打ちとはいえグロンギを倒してる、そして巨大なボディとスピードは欠けてるが圧倒的パワーを持っていた。

- 未だかつてない未知の強敵に些かクウガは全身から冷たい汗が流れるのを感じる。

『デカイ奴とはやり合ったことは無いが…やってみるか!』

しかしクウガは体勢を立て直し、ゴーレムを見据える。『あんなデカいのなら当てやすいな…超変身!』

クウガは紫のタイタンフォームから緑のペガサスフォームへ変化、そしてタイタンソードは弓型のペガサスボウガンに変わる。

『これでどうだ…!』

クウガはペガサスボウガンから圧縮され、封印エネルギーを混ぜた空気弾『ブラストペガサス』をゴーレムへ向かって数発放つ。

『…!?!』

ゴーレムにブラストペガサスに命中するが決定打には程遠く、ゴーレムはまだピンピンしていた。

『へっ…解つてたさ!』

ペガサスフォームからマイティフォームに戻ったクウガは駆け出してゴーレムへとハイジャンプする。

『てえりああああッ!』

『…!?!』

追い討ちの攻撃として封印エネルギーを込めた必殺『マイティキック』をゴーレムに叩き込むと、ゴーレムは今度こそ倒され、爆発した。

『あゝ…しんどかった…しかしこいつは何者なんだろう？』

- クウガはしゃがみこんでさっきまでゴーレムだった残骸をつつく。

『ま、グロンギよりも厄介なのは解った。さてと…。ん？』

- クウガがビートチェイサーで帰ろうとした時だった。

「これは…一体？」

『あの機械人形がスクラップに！？』

- 突然空からまた誰かがやって来る。声からして二人らしい。

『今日は随分空からのお客様が来る…な…！？』

- 真護はその人物のうちの一人を見て内心ショックを受けた。

- 『何故ここにいる？』…と、言いたかったが生憎そういう雰囲気ではなさそうなので瞬時にやめた。

- 何故かデフォルメ調の赤いウーパールーパーみたいな喋るトカゲ？と一緒にその『少女』は空からやって来た。

- 星を意匠としたアニメの変身ヒロインみたいな格好で、杖みたいなものを持っていたが…その少女の顔にクウガは見覚えがあった。

(…鈴原？)

- クウガⅡ神原真護が今日、桃月第三小学校の5年2組で出会った

ばかりの教え子・鈴原未来、その人だった。

「あの仮面の人が…これを？」

『ハッ…あれは、クウガ　！？』

・トカゲ？はどうかクウガを知ってる様なのか驚いた。

「…クウガ？」

『クウガとは今から遙か大昔…超古代文明の人間を襲うグロンギという邪悪な種族を全員封印したという偉大なる戦士の名前だよ…』

・トカゲ？は未来？にクウガについて説明、そして神妙な顔つきでジッとクウガを見つめる。

『しかし、変でスね…クウガは戦いを終えた後、棺の中で永き眠りについたと聞いたけど…なら、あのクウガは一体？』

『…。』

・クウガには何がなんだかサッパリだった…喋るトカゲ？ファンシ
ーな格好で宙に浮かぶ未来？もう訳が解らない…。

『…！』

『あ！？待つでス！』

・クウガはビートチェイサーに乗り込み、振り向きもせずに走り去ってしまった…。

「クウガさん…あの人は何者なんだろう…。」

・未来はその後ろ姿をただ見てるだけしか出来なかった…。「何でだ…何であいつが…鈴原が!？」

・クウガの変身を解いた真護はその辺の公園にビートチェイサーを停めて、木を殴る。

「解らない…あいつにあんな力があるなんて…何がどうなってる?」

・疑問に駆られてた真護…。そこへ。

『見つけたでスよ、あなたがクウガでスね?』

「あ…!?!お前はさっきのトカゲもどき!」

『と、と…トカゲー!?!失礼な!ボクは火の精霊・サラマンダーでス!』

・自称・精霊のサラマンダーはプンプン怒って真護へ怒鳴り散らす。

「悪い悪い…というか精霊なんてファンタジーの世界の産物かと思っただが、実際にいたんだな…。」

『それはこっちのセリフでス…あなたは何者なんでスか?何故クウガに…。うわあッ!?!』

・サラマンダーが質問した瞬間、真護はサラマンダーの頭を掴み、一番聞きたい質問をぶつけた。

「答える！なんで鈴原が…オレの生徒がお前みたいな得体の知れないトカゲと一緒にいる！？返答次第じゃ…！」

- 真護はアークルを出現させながらサラマンダーの頭を握り潰さん勢いでメキメキと締めつける。

『イダダ！？やめ…やめてください！中身…中身出る…話しますからやめてええええええええ…』

- 鈴原未来…そしてサラマンダー…二人（一人と一匹だが）は一体…？

3 - 未知の敵 - (後書き)

次回は未来の秘密や謎の宇宙勢力に関してサラマンダーが真護へお話しします。そして未知との遭遇も…

4 - 混沌 - (前書き)

すみません…書いてるうちに今回の話が難しくなっていました。
真護とサラマnderがある人物を交えてお話しします

4 - 混沌 -

- 場所は代わり、真護のマンション。

「さあ、全て話して貰おうか？」

- 真護はサラマNDERを部屋に連れ込み、早速未来について話を聞こうとする。

『あ…すみませんがもう一人、適任者に連絡いれましたので、来るまでもうちよっと待っててください。』

「そいつも精霊か…？」

「あ、いいえ、精霊じゃないです。」

- どうやらサラマNDERには連れがいるらしいが精霊ではないようだ…では一体？

『すみません、神原さんの部屋はここですか？』

- 呼び鈴が鳴り、誰かがやって来る…。

「はい、どうぞ。開けてますか…。」

『失礼します。』

「ら…。」

- 真護は部屋にやって来た者の姿を見て絶句する…。 - 全身真っ黒なボディ、ドラ焼きの様な平べったいフォルムの頭、口元にはパイプ、三本のカギ爪の様な両手…それは明らかに地球上の人種では無かった。

『どうも…宇宙人です。』

「嘘オツ!？」

- 真護はこの時、そういえば『未知との遭遇』なんてタイトルの映画あったな…と、心の中で思ったが、現在の状況がまさにそれだった。

「…粗茶ですが…」

『あ、どうもありがとうございます。』

『いただきます。』

(なんで火の精霊が宇宙人と繋がり持ってたんだよ!?)

- 真護は色々と突っ込みたかったが…他にも聞きたいことがあるため、敢えて我慢しながら茶を淹れて二人へ手渡す。

「それで、なんでこの…宇宙人さん(?)を呼んだんだ？」

『はい、それを説明するにあたって…あの機械人形を覚えてますか?』

- 機械人形…恐らくクウガに変身した時に倒したゴーレム(仮名)

のことだろう。

『もうお解りでしょう…あれは地球上のモノではありません…』

・ここで宇宙人が会話に参加し、説明する。

「なるほど…どうりで空から降って来たわけか…。」

『ここからが重要ですが。驚かないでくださいよ…？』

・宇宙人は神妙な顔つきで真護に『真実』を伝えた。『実を言うと…現在の地球は既に様々な異星人や勢力が目的をもって潜伏、または監視をしてる様な状態にあります。勿論私や私の仲間も例外ではありません。』

「な…！？じゃあアンタ、侵略者…！！」

『とんでもない！我々は違いますよ！？地球の調査ならしてますが…。コホン、話を戻します。』

・宇宙人は慌てて真護に人類へ敵対する意思は無いことを告げると説明を続ける。

『それらの利害が拮抗し、牽制し合っている状況で、人類の文明の発達も手伝って地球外からの一方的な侵略はされにくい…はずだったのですが。』

・そして宇宙人はあっさりと言い放った。

『その現状を敢えて無視し、欲望のままに破壊や殺戮をする者達の

存在がいくつか確認されました…我々はそういった侵略者達を「混沌を為す者」と呼んでいます。」

「『カオティック』…それが敵の名か…。」

『さて、次はボクの番でスね…。』

- 敵が判明したところで今度はサラマンダーが話に加わる。

『ボクはカオティック達への対抗のために宇宙人から情報を聞いたりしました…さて、あなたが一番知りたがったこと…未来ちゃんのことをお話しします。』

「…!!」

- 真護は焦る気持ちを抑えてサラマンダーの顔を見つめて話を聞く。
『未来ちゃんの持つ力はボクが与えた地球が持つ免疫システム・エレメンタル…例えばボクが持つ火の力、他にも水や風などの大自然の「属性」の力のことでス。』

「え〜っと…つまり？」

- 未来のことを説明するにあたって、サラマンダーは見事、解決に導く結論を真護へ出した。

『要は「魔法」です。』

「はあ!？」

- 真護の反応は最もだった。『魔法』などと聞けば確かに信じがた

い…しかし、現にサラムンダーの存在と空を飛んでいた未来の力を考えるとやはり『魔法』の存在を認めざるを得なかった。

「なんてこった…宇宙の侵略者に魔法だつて？ただでさえオレはクウガとしてグロンギと戦うことで手一杯なのに…。」

・真護は頭をガシガシ掻きながら混乱しかけてる自分を冷静にしようとする…。

『未来ちゃんのことや敵のことは話しました。次はあなたの番です！』

『サラムンダーさん？彼にも何か秘密が…？』

・サラムンダーは真護…否、現代のクウガについて知るため聞き出そうとする。宇宙人も興味があるのか、話を聞くことにした。

「解った…そうだな。トカゲはともかく、宇宙人さんは知らなさそうだからクウガについて改めて説明するか。」

『ちょっと！なんでボクはトカゲ呼ばわりでコイツは「さん」付けなんでスカ！？』

『コイツって…。』

・サラムンダーの細かい突っ込みは放っておいて、とりあえず真護は宇宙人にも解りやすい説明をするように勤めた。「クウガってのは地球の超古代文明を守護した戦士の名前だ。リント…当時の人間のことだが、そのリントをグロンギという凶悪集団から守り、永き眠りについた…。」

『なるほど…しかし…それが何故現在の真護さんがクウガに…？』

「んー…。」

- 真護は宇宙人の問いに少し間を開けてから告げた。

「実は…クウガに変身するためのベルトを偶然にも見つけてさ…『なんだコレ？』的な感じで触ったらオレの身体と一体化しちゃったんだ。」

『『エーッ！？』』

- 二人が驚くのも無理は無かった…そんなしょうもない興味本位でクウガになれたのだから。

「んで…その後、毎日が現代に蘇ったグロンギとの戦いだっただ。まあ警察との協力もあつたからなんとかなつた。」

- あまりにもアツサリ過ぎる説明にポカーンとする二人…。

「そっぴやさ…なんでトカゲはクウガを知ってるんだ？」

『またトカゲって言った！？それはボクが超古代の時よりも遙か昔から存在してたからでス！精霊を舐めんなでス…!!』

- 地球そのものから誕生した精霊たるサラマンダーからすれば直接の面識は無いがクウガは共に歴史を歩んできた古株なのだ。

「え…？お前、何歳だよッ！？」

『と…歳は関係無いでスよ!?』

『二人共、落ち着いて!』

- 多少脱線もあつたが三人はそれぞれの事情を知つた。 - ふと、真護は思つた。

「なあ…トカゲ、鈴原は…自分の意思で戦うことを選んだのか?」

『トカゲ言つなでス! 最初は戸惑つてました。けど未来ちゃんはそれでも戦うことを選びましたよ。…誰かが笑つて暮らせる平和な世界を望んで。』

(誰かが笑つて暮らせる…世界か。)

- それだけ聞くと真護は思い出した…未来が戦うことを選んだ理由がかつての自分と似ていることを。

『すみませんで…。あなたの教え子である未来ちゃんを巻き込んで…。』

- 申し訳なさそうにサラマNDERは真護に謝る。

「良いさ…鈴原が選んだことならオレからどうこう言える問題じゃない…それに大切なことを思い出させてもらったよ。」

『え…?』

- 真護はサムズアップしながらこう答えた。

「誰かの笑顔を守ること…そう、これからもな…！」

- 真護が力強く言うとき計の時間に気づいた…もうとっくに夜の七時を指していた。

「あちゃー！？もうこんな時間か…。アンタら、夕飯一緒にどうだ？リクエストありや何か作ってやるよ。」

『え？良いんですか…！』

『ありがとうございます！実はお腹空いてきまして…。』

「よっしゃ。じゃあ腕を振るってやりますか！」

- 真護は二人の嬉しそうな反応を見て、腕をまくりながらキッチンへ向かって夕飯の準備に取り掛かる。

- 宇宙・魔法・超古代…三つの異なる力の集結と邂逅が桃月、いや、地球全体で新たな戦いを予期していた…。

4 - 混沌 - (後書き)

宇宙人や魔法やらクウガやら…サブタイトル通り混沌とした状態になりました。話が難解だったりセリフ多めだったり反省点が…次回もお楽しみに

5 - ポケ・ン - (前書き)

他の連載が終了したため、長らく放置してたこの小説を復活させました(また不定期連載になります…)

今回サブタイトルがアレですが子供達の人気者の黄色い電気ネズミとかは出ません…内容が下ネタ?っぽく、ドぎついためご注意を…

5 - ポケ・ン -

（やれやれ…しかし大変なことを知ったもんだ。）

- 次の日、真護は5年2組の教室で授業をしながら昨日の信じがたい『事実』を思い返す…。

- 侵略者『カオティック』、魔法の力で戦う少女・未来と精霊・サランダー…まあ自分もグロンギなんて非常識な者と戦うクウガであるから反論出来ないが…。

（こんな小さな子供があんなポケモン共と戦ってるなんて信じられないよな…人のこと言えないけどな。）

- 真護は未来の顔をチラ見しながら黒板へ次々とチョークで字の羅列を書いていく。

（！？）

- 未来はというと、真護の視線を感じて慌てて赤くなった顔を雅の様にノートで隠してしまった。

「…と、まあ、こんなとこかな？少し早いけどキリのいいところで終わりにしようか。」

「…わーい！！」「」

- 真護の授業は数分早めに終わることが多く、生徒達から好評である。5年2組の生徒が真護のことを他のクラスの生徒に話すと大変

うらやましがられるという…。

「おーし、HR始めるぞー。」

・また、HRも特別なことが無い限り、これまた早めに終わるのだからウケが非常に良い。

（先生、なんで私の方見たの…？）

・と、思った時。

（んふふ…つくづく解りやすいですな～未来ちゃんは。）

・『プヒヒ』とニヤニヤ笑いながら怪しい笑みを浮かべる望だった。
・放課後。

「サラくん。昨日のことなんだけど…。」

『は？ああ、クウガでスね…。』

・未来は携帯を使いながらサラマンダーと昨日のクウガについて話し合っていた。

「クウガさんって…どういう人だったの？」

『そ、それは…』

・サラマンダーは未来からクウガの正体について質問されたが、サラマンダーは思わず口ごもる…。

（サラくん…はっ！？）

・ふと、未来は背後からの気配を感じる…。

・振り返ると電柱の陰から未来をジッと見つめてる…何故か象の覆面を被った人（？）がいた。

・未来は見なかったことにし、黙って歩くが足音が…振り返ると案の定、物陰に隠れてるようで隠れ切れてない象の覆面がまだいた。

「あの…サラくん？今どこ？」

『どうしたんですか？』

・未来はもう一度後ろをチラッと見て、象さんマスク（仮名）の姿を確認…『ジー…』と、未来を見つめていた。

「…ちょっと変な…象みたいな人につけられてるみたいなんだ…どーしよー？」

『未来ちゃん！ここは一発先制攻撃してやるでスー！』

「解った…怖いけど…頑張ってみるよー。」

・未来はサラマンダーのアドバイスを聞き、意を決して象さんマスクを睨む…小学生の未来では迫力に欠けてあまり怖くないが…。

「あの！誰ですか！？な…何が目的ですか！！」

・勇気を振り絞って未来は象さんマスクに目的を尋ねた…物陰に隠

れながら。

・象さんマスクは『ビクッ!』と動揺した…観念したかその姿を露わにした。

『よくぞ見破った。』

・物陰から出てきたものの正体…それは顔には象さんマスクを纏い、首から下は…。…黒のビキニパンツ一丁で、あとは全て裸だった。

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

・未来は象さんマスクのフルボディを見て、悲鳴というよりも絶叫に近い大声を上げた…ついでに完全に涙目である。

『本当の勝負はこれからだ!』

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

・何故か象さんマスクは自分の鼻の先をアピールした、なんと卑猥な…当然ながら未来はメチャクチャ嫌がった…。

・そして両者の間にしばし、沈黙が流れる…。

『パオーン!!危ないッ!!』

「キャアアアアアアアッ!」

・そう叫ぶなり、象さんマスクは軽やかに未来に向かって跳躍、未来はまたもや絶叫…ハッキリ言って『危ないのはむしろお前だ。』

と言いたくなる状況である。

『プゴッス!?!』

- しかし未来は咄嗟に道端にあつた地蔵を拾い上げてガード、それにより象さんマスクは下半身の象さんを地蔵の頭にもろぶつけてしまい、悶絶した。

『ギャアアアア...これは痛恨の一撃ってやつじゃないですか!?!』

- 象さんマスクは下半身の象さんを押さえながらビクビクともがき苦しむ。

「なんですか!?!警察をよびます!?!いいですかア!?!」

- 未来は重い地蔵を構えながら息を荒げて叫び、恐怖のあまり、小さな体を震わせながら涙をポロポロ流し始める。

「誰...誰ですか!?!」

『ポケ・ンです!僕、ポケ・ン!?!みんな大好きッ!?!』

- しばしの沈黙がまた流れ...

「重いー。」

『あー!ウソウソ!?!すいません!?!』

- 未来は抱えてた地蔵の重みに耐え切れずに手放し、落ちた地蔵は

倒れてた象さんマスクの頭スレスレを掠った。

『聞いてくれ…君は狙われているんだ…僕はそれを知らせにきたんだ…。』

- 象さんマスクはダメージから立ち直り、ゆっくり起き上がりながら敵意が無いことと自分は味方であるということを告げる。

「へ…変態さんじゃないんですか…？」

- 未来はというと、未だに警戒してるのか、地蔵を抱えたままだった。

『変態じゃない！！ロリコンだ！！』

- いらん訂正をした次の瞬間、象さんマスクの顔面に硬くて痛い衝撃が走った、どうやら未来が地蔵を投げつけた様だ…。

『…すみません、変質者です。本当にゴメンナサイ。』

「…はい。」 - その頃、学校の真護は…。

「先生ー！さよーならー。」

「さよならー。」

「ああ、気をつけてな！」

- 真護は声をかけてくる生徒達一人一人に挨拶をする…と、その時。

「先生！！大変！！」

「…た、大変ですー。」

「ニュースだよ！！」

「一条？犬神？城田？どうしたんだ？？？血相変えて…。」

・望と雅、そして城田という女子生徒が突然真護の元に駆けつけてきた。

「みんな、話があるならまずは落ち着いて…。」

「学校の近くで裸の人がいたんだって！！」

「な、なんだそりゃ！？変質者じゃないかッ！！」

・望の言葉を聞いて真護は思わず叫んだ…まさかこの平和なはずの桃月町に変質者が現われるなんて、世も末だ。

「わ、解った！犬神は職員室行つて集団下校を呼び掛けるように先生達に伝えてくれ！！」

「は…はい！解りました、行つてきます。」

「一条と城田は集団下校が始まるまで校門で生徒を集めるんだ！！」

「OK」

「解りました、頑張ります！」

・三人に的確な指示を告げると真護は学校に停めていたビートチェイサーに乗り込み、ヘルメットをかぶる。

「先生は見回り行ってくる！」

「え？見回り…って、先生ー！？」

・望の叫びも虚しく、アクセル全開で真護はあっという間に走り去ってしまった…。

・再び未来と象さんマスク。

『すまない…驚かせてしまったみたいだ…敵に服を奪われてしまつててね』

・象さんマスクは今は何故かコートを一枚羽織っていた。

『僕の名前は「エイト」、キミは狙われているんだ。』

「あ、あの…私が狙われている？」

・『むしろ狙つてるのはお前だろうが！』と言いたくなるが…エイトと名乗った象さんマスクは未来に危機が訪れることを告げる、未来は未だに警戒してるのか？地蔵を抱えてる。

『キミは何か不思議な力があるみたいだな…きつと奴等はその力を…』

・言いかけた直後、風が吹き、エイトのコートがハラリとあおられ、

裸体がチラツと見えたが当の本人は仁王立ちで堂々と構えてる…どう見ても変質者だ。

『おっと、強風が!』

「ギャーッ!」

『すまない!僕は実は酸素を皮膚で吸収しないといけないタイプの宇宙人だったんだ…ハアツ、ハアツ…苦しい!早く空気を!!パオーン!!』

- あおられて裸体が激しく見えようが、未来が絶叫上げようが気にせず、変態は本当かどうか怪しい自分の生態を言いながら両腕を大仰に広げてハアハア息を荒げながらジワジワと歩み寄…。『…何さらしとんじゃ!テメエエエーッ!!』

『へポッ!?!』

- …寄れなかった、何者かがエイトの顔面へ飛び膝蹴りをかまし、間一髪で未来の危機を救った…。

『…大丈夫か?』

『未来ちゃん!!』

「クウガさん!?!サラくん!!」

- 未来を救ったのはなんと、クウガとサラマンダーだった。

- 実は真護は学校から飛び出した後、サラマンダーから未来が変態

に絡まれてると聞いたが、その変態…否、エイトがあまりにも異質過ぎたため、思わずクウガに変身してしまったのだ。

『なんなんだよ…こいつは…?』

『ポケ●ンだよ!!』

『黙れ!変態!!』

『グプポツ!?!』

- エイトのふざけた発言を許さず、クウガは容赦無く殴り飛ばす。

『変態野郎はオレに任せてソイツと逃げろ!!早くッ!!』

「はい…!!」

- 未来は顔を赤らめながらクウガに言ってサラマンダーと逃げ去る。

『覚悟は出来たか…この変態ポケ●ン!!全国のパケ●ンファンのチビッコ達に謝れやああああッ!!』

『ポケ●ンは虐待反対だよ!?アッー!』

- クウガの無慈悲な攻撃の数々…エイトは気絶するまでド突きまわされたという…。

- 数分後…。

『解ったな?二度とあの娘に近づくな…さもないと…』

『ヒイイイ！すみません！！』

・クウガはヤンキー座りで威圧的に、ボロボロになって倒れたエイトに脅しをかける。

『だけど…あの娘は間違いなく狙われてる…気をつけるんだ…ガクッ…』

『なんだと…？』

・エイトが最後に不穏な言葉を言い残すと同時に彼は気絶してしまった。

（なるほど、グロンギ、あるいはカオティックにか…だが、やらせはしない。）

・クウガがそんなことを思いながら、停めてたビートチェイサーに寄ろうとした時…。

「あ…。」

『よッ…大丈夫みたいだな。』

・そこには何故か逃げたはずの未来がいたがクウガは別段気にせず軽く応じる。

『あの変態にはきちんと注意してやったから、もう付きまとわれなはずだよ。』

「あ、あの…その、私…あ、あれ？」

・未来はただただ礼を言おうとしたが、目から涙が溢れ、上手く最後まで言えない。

「うぐ…うつう…。」

『怖かったのか？』

「…は、はい…うつ…。」

・あんな変態に襲われた（？）のだから無理も無い。

・鈴原未来は魔法の力を行使する地球の守護者以前に、一人の年端のいかない少女である…その内面はあまりにも脆い。

『そうか…。』

「え？あ…。」

・クウガは未来の頭を優しく、そっと撫で、しゃがんで同じ目線で話す。

『怖いと感じたり泣いたりするのは弱さじゃない、オレだってそういう時がある。』

「え？」

・未来は驚いた、ゴーレムをも倒すあのクウガに恐怖という感情があったのだから。

『それは人として大事な感情だ、恥じることは無い…じゃあな。』

「クウガさん…ありがとうございます！」

・涙を拭って笑顔で改めて礼を言う未来に、クウガはサムズアップで応え、ビートチェイサーで走り去る…。

（お前も頑張れよ、鈴原…あとついでにトカゲ。）

・そう願いながら夕日の赤と区別のつかない程溶け込んだクウガは途中で真護の姿に戻り、帰路に行く…。

5 - ポケ・ン - (後書き)

5…祝・復活を飾る話が何故か変態の話に…ちなみにエイトの出番はもう無いでしょう(断言)

今回の気分を悪くなさった皆様、まことに申し訳ありません、次回
は真護が変な姿になります(断じてエイトみたいな変態な姿ではあり
ません)、お楽しみに、柳雨でした

6・迷える子羊・（前書き）

今回は真護がヘンテコな姿にされるお話です

6 - 迷える子羊 -

『うりゃあああっ!!』

『ギギヤア!?!』

『がはっ!?!』

- 仮面ライダークウガ 神原真護は現在、街中でグロンギのエビ種怪人メ・ゾエビ・ギとカオティックの一人で可愛らしい羊の姿をした宇宙人・ウール星人と三つ巴の戦いを繰り広げていた。

『ゲレデ・ビガラザベパ・ボソグ・クウガ! (せめて貴様だけは殺す、クウガ!)』

『うるせえ! エビ野郎! 痛ッ!?! 硬てえッ!?!』

- ゾエビはハサミを振るってクウガを切り裂こうとしたがクウガはこれをかわして、反撃するが、ゾエビの殻が硬過ぎたため、逆に手が痛くなる。

『なら! 超変身! ウラアッ!?!』

『ガッ! ギヤアアアッ!?!』

- クウガはタイタンフォームになり、タイタンソードでゾエビの固い殻をも問題とせずに刺し貫き、カラミティタイタンを発動させて爆死させた。

『スキあり！えい！えい！』

『…真面目にやる気あんのか？』

・隙についてウル星人が襲ってきたが、タイタンフォームの装甲を虚しくポカポカ叩いてるだけだった。

『お前もだ！』

『グハツ！？』

・クウガはタイタンソードでウル星人をいとも容易く叩つ斬つてしまう。

『う…あ…。』

『ん？なんだ？』

・クウガが瀕死のウル星人が何か言いたそうにしていることに気づく…。

『呪ってやる。』

・そう言い残し、ウル星人は絶命、そしてクウガは複雑な気分になった…。

（後味悪ーッ！！） ・翌日の朝・真護のマンション。

「んあ…眠…ふあああ…」

・起床した真護はベッドから出て、重い身体を動かし、顔を洗うために洗面所に向かい、鏡を見た途端…。

「…は？」

・化石の様に固まった。

・何故なら、そこに映ってたのは真護ではなく、全体的に丸っこく、モコモコした純白の毛を纏う可愛いらしい羊さんだった。

「メエエエエエーッ！！」

・突然、羊となってしまうた真護はただただ叫ぶしかなかった…。

「なんでこんな姿に…？」

・真護は羊姿で半泣きしながら思い返すと…。

『呪ってやる。』

（呪われたーッ！）

・昨日戦ったウル星人の言葉がふと脳裏に浮かぶ、死に際に何らかの呪いをかけられてしまったらしく、そのせいで羊になってしまったようだ。

（クソ…どうすればいいんだ？）

・羊の本能が働いてるのか？知らないうちに四足歩行になりながらウロウロしていると…。

『真護さーん、また宇宙人とグロンギが出ましたが…はうあ!?!』

『はうあ!?!』

- 最初に会った時以来、敵が出る時は、宇宙人が真護のマンションに設置したモニターで緊急連絡をしてる…宇宙人は羊になった真護を見て、またいきなりモニターに映った宇宙人を見て真護は凄まじく驚く。

- 両者にしばらく間を開かせてから…。

『申し訳ありませんが出撃してもらえませんか?』

『この姿でも自分と認識されるとム力つくなあ…。』

- 失礼な宇宙人にプリプリ怒る真護は羊の身体でビートチェイサーに乗ろうと外へ出たが…。

「…足が届かない!!チキショー!!」

- 足が短過ぎてビートチェイサーに乗れなかったので仕方なく、ヤケ気味に二足歩行で走り出した…。 - 桃月町。

『グルルル…!!』

『バ…バプザ・ボギツパ!?(な、なんだ、こいつは!?)』

- カンガルー種怪人ゴ・ガルガ・ダはゲゲルを楽しんでいた最中に『未知の生命体』と遭遇してしまった…。

・口から灼熱の炎が漏れ巨大な身体をした犬に似た怪物…。

『グガアアアッ！！』

『ギ…ヒヤアアア！？』

・別世界から呼び出された来訪者、魔犬・ヘルハウンドは口から炎を吐いてガルガを焼き尽くした上に、鋭い牙でその肉を貪り喰らった。

「…マジかよ！？なんてヤツだ、あの犬野郎！」

・真護はゾツとした…ザコのグロンギとはいえ、ヘルハウンドはあっさりそれを餌にしまったからだ。

『グルル…ガアアアッ！！』

（狩られる！？）

・ヘルハウンドは真護の存在に気づいた様で、鋭い目つきで睨みつけドスドスと足音を立てて走ってきた。

「うわっ！？鈴原に任せた方がいいのか、こいつは！」

・突進してきたヘルハウンドをかわしながらそんなことを考えるが、いくら力を持つとはいえ子供を戦わせるのは忍びない…。

「ん？まさか出るとは…まっ、いつか！変身！！」

・今の真護の腰から何故かアークルが出せたので構えを取り、クウガと化す…が。

『…なんじゃこりゃ！？』

・クウガ自体には問題なくなれたが、問題なのはその『姿』だ。

・頭にはねじれた羊のツノ、腕や脚、首周りにはモコモコした羊毛に包まれているというヘンテコな姿…敢えて名付けるならば『仮面ライダークウガⅡウルマイティ』といったところだろう。

『チクシヨウ！？あのクソ羊！！重ね重ね…！！』

・クウガは今は亡き（殺したのはクウガだが…）ウル星人に文句を言いながら、ヘルハウンドに立ち向かう。『食らえ、ワン公！』

『ギャウン！』

・クウガは試しに飛び掛かってヘルハウンドを殴ったが、どうやらジャンプ力や腕力には支障はなく、普通にダメージを与えられた。

『グウウウ…ギシャアアアッ！！』

『しまっ…熱ッちいいいいいい！！？ってか火！毛に火がついたアアアアア！！』

・ヘルハウンドは炎を吐き出してクウガを丸焼きにした、尚、クウガは羊毛に包まれてるため、余計に火の周りが早かった。

『犬っコロ！いい加減にしやがれ！！超変身！』

『ガウウ…ウゲアッ！？』

・クウガは青い眼と鎧、ドラゴンロットと呼ばれる棒を使う形態『ドラゴンフォーム（現在はウールドラゴン）』となり、すかさず一撃を入れるとヘルハウンドは激しく苦しむ。

『ん？おかしいな…何故だ。』

・ドラゴンフォームはスピードこそ優れてるが代わりにパワーと防御力が大幅ダウンしてしまう…なのに思い切り効いていた。

・それもそのはず、ドラゴンフォームは『水の力』を司る形態、それが作用したためか？炎を使うヘルハウンドには天敵だったようだ。

『でりゃあああッ！！』

『ウガアアアッ！？』

・ヘルハウンドの爪攻撃を回避しつつ、クウガは素早い連続突きを繰り出して確実なダメージを蓄積させる。

『ゴガアッ！！』

『何度も効くかアッ！！』

・再び炎が吐かれたが、ドラゴンロッドを高速回転させてかき消す。

『ハアアアアア…ハッ!』

『ギヤイン!?ゴギヤアアアアア!』

・クウガはヘルハウンドの口にドラゴンロッドを突っ込んで、棒先から封印エネルギーを流し込み、必殺技『スプラッシュドラゴン』を発動、ヘルハウンドの肉体は爆散した。

『や、やっと倒せたか…だけど…』

・変身を解いた真護はその場に尻餅をつく。

「変な変身は疲れる。」

・ウールマイティやウールドラゴンは全くのイレギュラーな変身のため、普段の倍、疲労が激しいのが欠点だと今知ってしまったようだ…。

・その頃…。

「ねえ知ってる?仮面のヒーローの噂…。」

「え?何それ?」

「宇宙人の侵略、血に餓えた怪物達と日夜戦ってるんだって。」

・街中を歩く望・雅・未来はそんな噂話をしていた。

「色々噂はあるけど、もしかしたら人間じゃないのかもね？」

「望ちゃん…なんか怖いよ、その話…。」

「ヒーローだから大丈夫じゃない？」

・力説する望とは対照的に雅は怯え、未来は苦笑いを浮かべる。

「なんでもその身体には真っ赤な炎を纏い、正義の心でいつも私達を守ってるらしいよ」

「え…？本当？」

「今日もどこかで戦ってるのかな…。」

・…なんてことが語られてた同時刻、真護は…。「あのワン公に勝てたのはいいけどさ…なんでまだ元に戻らないんだよッ！？もう今のオレ、クウガでも人間でも神原真護でもねーよ！！どうにかなんねーのか、コレ！？」

・そう、未だに真護は人間の姿ではなく、羊の姿…携帯で連絡を取る宇宙人相手に八つ当たりに近いくらいにキレまくってた。

『あはは…その姿も結構可愛いですよ？』

「いや、聞けよ！？」

・真護は自分が今、羊であることも忘れてトコトコ二足歩行しながら携帯に向かって大声を…彼が街中を歩く度に次々に一般人が驚い

ていた。

「まあいいや…買い物してから帰るから続きは家で。」

『あ、はい、解りました、ごゆつくり。』

- 真護は一旦話を中断、買い物始める。

「今日はもう疲れて面倒だから…カレー作ろうカレー、しばらくカレーで生きてく。」

- カレーの材料を買いに行くことにした…今現在カレーを作って食べることしか頭に無いからか？慣れなのか？周囲の奇異の目も気にせず、いつの間にか羊の姿にすっかり順応していた。

- 精肉店。

「すみません、ブタバラください。」

「!-!」

- 店員が驚くのも無理は無い…可愛い羊が千円一枚出してブタバラを買いに来た、中々にシュールだ。

「…。」

- 店員の視線は近場の壁に張ってた張り紙にいくので真護もそれを目で追うと…。

『ジנגスカン、オススメ。』

「!？」

「あ…行っちゃった…。」

- 張り紙の文字に身の危険を感じて真護は店から逃げ出した…
羊^{ジンギ}肉^{スキャン}料理なんて冗談ではない。

- 公園。

「はあ…生きるってツライな…。」

- 哀愁漂う後ろ姿のくたびれたサラリーマンがブランコに座りながら、変なことを呟いてると…。

「「あ。」」

- 買い物中の真護と御対面…。

「ジロジロ見てんじゃねーよ!！」

- 真護はイラッとしたのか、つい怒鳴ってしまった…。

- 帰り道。

「あーもう、嫌な一日だな…ん?」

- カレーの材料入りのエコバッグ片手を提げながらトットコ歩いていると…。

「あ！見て見て雅ちゃん！未来ちゃん！羊だよ羊！！」

「本当だ…可愛い…。」

「でも、なんで立って…。」

（一条！犬神！鈴原ーッ！？ハッ…イカンー！！）

・まさか教え子にこんな姿を見られるとは…未来が何か言いかけたため、慌てて四足歩行に切り替える。

「メ…メエ…。」

「あれ？気のせい？」

・幸い対応が早かったため、気づかれてないようだ…冷や汗を流しながら真護は羊の鳴き声を出す。

「そーれ！うわ…モコモコのフワフワだよ！？雅ちゃんも未来ちゃんも触ってみなよ！」

（ちょ…一条！勝手に乗るなアアアアアッ！！仮にも君達の先生だからね！？オレ！！）

・いきなり望が真護の背中に乗っかるので、怒りだす。

「あ、あの…えい、わあ…モフモフするよ…。」

（い、犬神、変なとこ触らないで…そこはちょっと…。）

・雅は真護へ大胆に抱きついた…一体どこ触ってるのかは内緒である。

「おとなしい羊さんだね、ふふ…。」

（…って、おい、鈴原、お前も。）

・ツッコミ入れるのも諦め、真護は黙って未来に頭を撫でられた。

（あの時と逆じゃないか…。）

・昨日は変態から未来を助け、頭を撫でてやったが、まさか自分が頭を撫でられようとは…。

（…まあ、いいか…。）

・真護はもう諦めてその場に座り込み、大人しく子供達にいじられることにした…生徒とはたまにはこんな触れ合い方も良いものである。

「あれ？エコバッグ…食べ物入ってる…。」

（しまったああッ！！）

・まさかエコバッグの存在に気づかれるとは…だが。

「きつとお使いだって！犬だってお使い出来るじゃん！」

「そ、そっかあ…。」

「私は自分で買い物してるのかと思ったよ。」

（鈴原、大正解！？）

…つと、最後の最後まで冷や汗タラタラな一日を過ごし、翌日、真護は元に戻ったという…。

6・迷える子羊・（後書き）

6…書いてるうちに自分でも「唐突に何故…羊？」と思ってしまいました（おい、作者…）

そしてウールマイティやウールドラゴンなる変なオリジナルクウガが誕生、こちらでも多分もう出番はありません

クウガ本編未登場のグロンギ、ゾエビとガルガを出してみました、今後も本編登場のと交えて出してみたいと思います

次回もお楽しみに、柳雨でした

7・シヨート×3・（前書き）

今回は短いシヨートストーリー3本立てです

バイオレンス&p・グダグダ要注意

7・ショート×3・

・1本目・『悩める少年』。

『グジュ、グジュ…!!』

「うわああああ!! た、助けてえええええ!!」

・眼鏡をかけた少年がグロンギのウミウシ種怪人「ゴ・ミウジ・ギ」に襲われていた時だった。

『ハッ!!』

『ギユアアアアッ!?!』

・仮面を纏う金のツノと緑の鎧の戦士…否、クウガ「ペガサスフォーム」が放ったブラストペガサスがミウジを貫き、爆死させた。

「え…な、なッ!?! あなたはもしかして…。」

『…もう大丈夫だ。』

・これが少年・近藤学とクウガの運命の出会いだった。

「あ…あの! あなたが噂の仮面のヒーローさんですよね!?!」

『そう、なるなあ…（…あ、よく見たらコイツ、オレのクラスの近藤じゃないか）』

「ちなみに学は普段かーなーり、目立たない地味な存在だが、これでも5・3組…真護が受け持つてるクラスの生徒の一人である。」

「あの…僕、近藤学っていいいます、小学5年生です！」

（知ってるって）

「お願いです！僕の悩みを聞いてくれませんかッ！？」

『いや…そういうのはやってないんだが。』

「何を思ったのか？いきなり学はかなりテンパった様子でクウガに悩み相談を持ちかけた、クウガは当然断ろうとしたが。」

「お願いします！僕悩んでるんです！あなたなら…あなたならきつと解決してくれるはずなんです！！！」

『わ、解った、解った！その悩み、言うてみい（よほどのことなんだな…）。』

「果たして学の悩みとは…。」

「あの…僕…アイドルが好きなんですが…。」

『…はい？』

「あ…あ…握手とか緊張して…何も話も出来なくて…どうすれば勇気が出るか…。」

・赤い顔で学は自分が抱える悩み…アイドルとの会話や握手をするための勇気が無いことを打ち明けるが…。

(…心配したオレがバカだった。)

「！」

・クウガは学のアホな悩みに思わず頭を抱えながら、ベンチに座り込んでしまった。

「…すみません、こんな話…仮面さんに言っても…。」

『いや…何…力になれなくてすまん…。』

・学はベンチに座りながらクウガに詫びるが、クウガも期待に応えられないことを謝罪する。

「僕ダメなんです…いざとなると逃げちゃうんです…好きなのに…。」

『つまり…その勇気をオレに求めたわけか…。』

・そう、比較的内気な性格の学はヒーローたるクウガから勇気をもらおうとしたのだ。

「憧れなんです…応援してきたいんです…ファンとして…」

『憧れ、か…。』

・しばらく間を置いてからクウガは立ち上がり、背を向けながら学
に告げた。

『少年、よく聞け…。』

・学は息を飲み、クウガの言葉を待つ…。

『アイドルなんて幻想だ。』

「!?!」

・非常に非情なクウガの思わぬ答えに絶句する学。

・クウガは学の肩に手を置き、アップで迫りながら。

「解つたな？」

- 迫力を込めて告げる。

「はい。」

・そしてクウガはそれ以上何も言わずに夕日をバックに立ち去る……

ヒーローからも程遠く、憧れを抱きにくい後ろ姿だ。

（厳しい人だ…。）

・学はそう思いながら家に帰って、DVDプレイヤーの電源をつけて、桃月町で今話題のアイドルグループ『桃組』のDVDを見始める…。

しかし、ここでクウガが最後に言い残した言葉が学の頭にリピートされる。

- 幻想だ… 幻想だ… 幻想だ… 幻想だ… 幻想だ… 幻想だ… 幻想だ…
想だ… 幻想だ… 幻想だ… 幻想だ… 幻想だッ!!

「あー!!」

- 学は叫びながら頭を抱えた後、桃組の写真集をギュツと抱き締めながら涙を零し、呟く。

「でも、好きなんだ。」

少年が少しだけ大人になった瞬間だった。
2本目・『重いのは
体重じゃなくてオレのコブシ』

- 今回現われた敵は全長約3m近い体格、頭にツノが二本生え、太い両腕に尻尾が生えた力オティックが放った怪獣…重力怪獣・グラビトンである。

- 立ち向かうは既に変身してファイティングポーズを取ってる…我らがヒーロー・仮面ライダークウガ（現在はマイティフォーム）。

- 太陽が降り注ぐこの桃月児童公園で二人の戦いが始まろうとしていた。

- おおっと、グラビトンのチョップ、クウガはガードして頭を守る。

- チョップ、チョップ、チョップの嵐…。

- おーっと、ここで全裸の子供が乱入、興奮し過ぎて全裸になった様だ。

- ここでクウガの眼が光る…反撃か？

- おーっと、逃げた、クウガが逃げた…。

『ぐあっ！？』

- だが、突然クウガの全身に異常な『重み』がのしかかり、地面に倒れてしまう。

『なんだこれはッ！？身体が重ッ…動きが鈍く…！』

- クウガは重い身体をどうにか立たせてグラビトンを睨む、ここで

宇宙人のアドバイスが聞こえた。

『気をつけてください、グラビトンの周囲には重力が何倍にもなる力場が発生しているので動きが不自由になりますよ。』

『マジかよ…って。』

・クウガがグラビトンの特殊能力に唖然としてた時、ふと自分の周りをみると…。

「すげー!!」

「頑張れー!!」

「ヒーローめっちゃシブい!!」

『…なんか盛り上がってる!?!』

・いつの間にか公園で遊んでいた子供達を中心としたギャラリー達が集まり、クウガを応援していたのだ。・しかし、そこでまたグラビトンが^{ダブル}Wチヨップ。

・クウガとつさにガード。

・チヨップ、チヨップ、チヨップ、チヨップ、チヨップ。

・チヨップ、チヨップ、チヨップ、チヨップ、地味にチヨップ、地味に痛い。

『オルアアッ!!』

『ギャピイイイイツッ!』

「クウガはついにキレた…反撃として全力全開の鉄拳をグラビトンの顔面に叩き込む。

「クウガさん……あのー？」

「確かに重かったけど、そこまで動けないわけじゃないな。」

・クウガは重力で重くなった身体を器用に動かしながら、倒れたグ
ラビトンに近寄る。

「クウガさん……子供達も見てますよ？ 気をつけてください……。」

知らん

・クウガの仮面の下では真護がものつそ良い笑顔で宇宙人に返事した。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアーツ！！！！」
♫

- クウガの某奇妙な冒険の主人公の必殺ラッシュを食らってグラビ
トンは血を撒き散らしながら宙を舞って、地面をゴロゴロ転がり、
そのまま二度と動かなくなった、恐らく天に召されたのだらう…。

- ちなみにギャラリー達は青ざめた顔でドン引きだ、拳句の果てに
は泣く子供まで出る始末…。

- 自身の赤いボディをさらに返り血の赤で染め、血がこびりついた
拳や顔を拭いもせずに、クウガはそのまま静かに立ち去った…。

- クウガの勝ち。 - 3本目・『地球まるごと超決戦』。

『よく来たな…地球の戦士よ、畏と知りながら…』

- 暗雲に包まれた空の下…クウガと対峙するは四人組の侵略者…ク
ウガは四人の発する雰囲気にも飲まれずに、その瞳で彼らを見据え
る。

『我々は魔王デスダーク四天王だッ！！』

『いきなり四人で攻めて来るか！普通ッ！？』

- 魔王デスダーク四天王…リーダー格のダース。ーダーのパチモノ
みたいな黒ずくめの仮面とマントの男、ドラクエのギ。ンテスに似
た一つ目の鬼に似た棍棒を持つ巨人、頭にマゲをしたフンドシー丁
の侍もどき、虚ろで上の空的な眼をした妖精もどきがクウガに名乗

りを上げるが即座にツッコまれた。

『お前がいつの間にか持っていた賢者の石を渡してもらおうか!!』

『あー…昨日拾った、コレっすか?』

・クウガはダース。ーダーのパチモノが言う、ハ。レンやハリ。タに出る様な力を到底持つてなさそうな石ところを取り出し、気怠そうに答える…ぶっちゃけどうでもよさそうな態度だった。

「ダメよ!!その賢者の石が敵の手に渡ったらタカシ君は一生入院したままかもしれないのよ!？」

『誰だ、お前!？あとタカシ君って!？』

・唐突に謎のソバカスがついた田舎娘・よし子が出現し、クウガにツッコミ入れられた。

・そしてクウガが何気なく、桃月病院に視線を移すと…。

「…。」

・何もかも諦めて、眼はどこか虚ろで…今すぐにも窓から飛び降りかねない雰囲気。タカシ少年がクウガを窓から見つめていた。

『タカシ君、元気出せっ!』

・タカシ少年に励ましのエールを送った直後…。

『『『『ぐはッ!!毒だ!?!』』』』

『四天王！お前ら今朝何食べた！？』

・突然四天王達は謎の吐血をし、ダース。ーダーもどきを残して他の三人は即死した…そしてダース。ーダーもどきは仮面の下から素顔を見せてクウガに何かを伝えようとした。

「よくぞ私を倒した…我が息子よ…よくぞ父を超えてくれた…ゴフッ…！」

『お前も誰だッ！？』

・ちなみにクウガ（真護）とこのダース。ーダーもどきには親子関係など全く無い…真護はれっきとした純地球人であって宇宙人の血など引いてないし、このあと何らかの親子的なイベントも起きないのであしからず…。

「ま…魔王、ゴフッ…デスダークはあのヘルダーク城にいるのだが、ゴフッ…ゴフ、ゴフッ…！ゴフッ…！」

『誰！？ラスボスか！？』

「ゴフッ…ゴフッてゴフッ、ゴフレばすぐゴフッ！ゴフ、ダーク城に行く…ゴフ、ゴフッ…！ゴフッ…！」

『「ゴフ」が多すぎッ…！』

・それだけ言うと安らかな顔でダース。ーダーもどきは息を引き取った…。

『結局死ぬんかい！？』

・そして間髪を入れず、よし子の側に何故か、あ。たのジ。ーの丹。に似た眼帯つけたオッサンが現われる。

「ゴフ、ゴフ、ゴフ、ゴフ…ゴコッブブ、ゴブ…。」

「そうよ！ゴフ、ゴフ、ゴフ…ゴフゴス！！」

『お前らもゴフゴフ言っなあああッ！！あとその丹。もどきは誰だああああッ！？』

・謎の『ゴフゴフ語』で会話するよし子と丹。もどきにクウガは絶叫に近いツコミを入れたが、今度はドラ。エの大魔王ゾー。に似たラスボスチックな奴がいきなり現われる。

『よくぞここまで来た、ゴフ、私がゴフ、ダークだ…ゴフの中のゴフでゴフゴフ、なのだ…この地上をゴフゴフとゴフに変え…』

『お前もオオオオオッ！！』

・まさかラスボス？まで『ゴフゴフ語』とは…もうクウガはもうツコミ切れぬ…。

- しかし、なんだかんだでデスダークを倒したよし子であったが、その時の魔力によって破壊神ヘルダークがよみがえってしまったのだ。

『おいしいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii文章がナレーションに変わってるぞオオオオツ！？あとよし子が倒したんかiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！？』

- その破壊神の力は地球と魔界に穴を開けてしまい、大変なことに…。

『ねえ…。』

- 地球壊滅まであと365日！！よし子は仲間達と共に旅立つのであつた！！

『おい！？』

- ネギを構えるよし子とその仲間達…超巨大ロボットと丹。もどき、そしてタカシ少年が破壊神ヘルダークに立ち向かう…！！

- 戦いはまだ終わらないッ！！

『終わんなああああああああああああああああああああ
あああああーッ！！！！！！』

7・シヨート×3・（後書き）

7：3本目に至ってはパロ？がたくさんで本編とは何ら関係ないキャラが登場、少年漫画チックなラストに：真護のキャラもかなり崩れてきました（イメージ的には私の別作品『仮面ライダーディケイド・クレヨンしんちゃんの世界』の士とユウスケを足して二で割った感じですかね？）

そのうちプロフィールも作りたと思います

この小説の戦いもまだ終わらないッ！！（もう少し続きます）

次回は急展開を予定、お楽しみに

8 - 集結 - (前書き)

今回から本格的な戦いの序章となります

まずはゆるい話からスタート

いきなり冒頭から非常に紛らわしいことが書かれております、ご注意ください…

8 - 集結 -

- 以上、今までの話、今まで起きた出来事は全て夢オチでした。

「ちよつとマジかー！？ちよつと待ってくれええええッ！！」

- 真護は唐突に謎のわけ解らん空間に放り込まれ、そこで発生した渦みtainなものに巻き込まれながら、吸込まれていく…尚、一緒に宇宙人やサラマンダーも巻き込まれたが真護は全く気づいてない。

「アッー！！たーすーけーてーくーだーさーいー…！！」

- 真護の叫びが虚しく響き、そのまま姿を消してしまう…

- ????

「先生…おい。」

「う…うん…。」

「先生ッ！起ーきーろー！！」

「ハッ！！」

- 真護は汗を流しながら起き上がった…周りを見渡すところはいつもの5年3組の教室だった。

「先生やつと起きた。」

「週末のバザーはどうするんですか？」

（ゆ、夢才チ…？）

・真護は自分の顔をつねって、心を鎮めて自身の身体にあるクウガの力を確かめる…大丈夫だった、その気になれば今すぐにでも変身可能だ。

「しかし、恐ろしい夢を見た…。」

「HR中に寝るからだよー。」

「す、凄いうなり声でびっくりです…。」

・どうやら真護はHR中に油断して寝てしまったようだ…彼を起こした望と雅が呆れる。

「すまん…けどさ、『怖い』じゃないか…今までのことが全部夢才チだったら…。」

「せ、先生…。」

・神妙な顔つきでふとシリアスな雰囲気を漂わせる真護の顔を見て全員黙り込む…。

・三週間限定の非常勤とはいえ、真護はこの5年3組の生徒達との思い出と呼ぶには短い『繋がり』が『実は全部、夢才チでしたー』
なんてことだったら…考えただけで恐ろしい。

「そ…そんなことはありません！私達との出来事の数々が夢なわけな

「いじゃないですか!!」

「…!?!」

・驚愕する真護とクラス一同の視線が一斉に未来に集中する…普段押しの弱い彼女がそんなこと言い出すとは誰も思っただけ無かったからだ。

「…悪い、そうだな…ありがとな鈴原!オレ、バカなことやって…」

「あ…い、いえ…」

・真護は頭を掻きながら照れくさそうに笑みを浮かべ、未来は顔を赤らめて急に恥ずかしそうに縮こまる…。

「お…い…お二人さん、今はHR中なんだけど…?」

「やべッ!?!忘れてたッ!?!」

・真護は望に言われ、慌ててHRを再開させた。

「みんな、週末のバザーだが、入院中の麻生先生の提案で少しだけ企画が変わったぞ。」

・そう言いながら真護は黒板に『仮装バザー』と書いた。

「あの…仮装…ですか?」

「ああ、せっかくだからみんなで楽しもうぜ。」

「急に仮装なんて言われても…困るよね…何着よう?」

「んー?でも楽しそうじゃない?」

・真護にそう言われて困惑する者、ノリ気な者、様々な反応をする生徒達はそれぞれ何をするか話し合い始めた。

「仮装って言うっても色々あるよね?ハロウィンみたいに…モンスターとか?」

「学芸会みたいな昔話系もベタだよね…。」

「時間もあまりないから凝ったのも作れないし…。」

・未来・城田・雅があーだこーだ話していると望がやって来て。

「雅ちゃんは毒虫なんてどう?」

「毒虫って何!?!」

・望に突拍子も無いアイデアを言われ、雅は『アゝー!!』と叫ぶ。

「だって雅ちゃん、最近あんなに真剣に毒虫になる小説読んでたのに…。」

「確かに毒虫に変身する本だけど…だからって…。」

・いたずらっぽく『プヒヒ』と笑う望は最近、雅が作家フランス・

カフカの主人公の青年・ザムザが虫になってしまつという『変身』というシヨッキングな内容の本を読んであることを知つてゐるためにそう提案した。

「そつといえば先生は何かやらないんですか？」

「え？オレがか？…ええと…」

・未来に急に話題を振られて返答に困る真護。

「先生は女装とかよくない？」

「じよ…女装！？」

・望のまたまたとんでもアイディアが炸裂、真護は自分の背筋が凍つた気がした…冗談ではない、何が悲しくて女装なんぞしなければならんのだ。

「先生は割と素材カオが良いからさ…意外と美人さんになるんじゃない？一度着てみなよ！ほらほら。」

・望の手には何故か大人の女物のスーツやスカートにカツラが…そして真護にジワジワ迫り…

「おい！悪ノリもいい加減に…な、何をする！？やめれ、一条！！…アッー！！」

「きゃあああ！？」

「望ちゃん！何してるの！？」

- 雅は顔を赤らめて絶叫し、未来は同じく恥ずかしそうに顔を赤らめ手で目を覆い隠しつつ、指の隙間から望に脱がされる真護を見ていた…女の子がそんなもの見ちゃいけません。

- 数分後…。

「うっ…。」

「こ…これは…。」

- 結論から言おう、真護の女装姿は…。

「すごく…。」

- 恐ろしいまでに…。

「…キレイです。」

- 完璧にハマリ役だった。

- メイクを施されており、男だと教えられない限り、一目見ただけでは絶対に女性と間違われる綺麗な顔立ち。

- 長く艶やかな黒髪のカツラをリボンで結んだシンプルながらも、美しさが際立つ髪型。

- 無駄の無いしなやかな細身であるため、女性用スーツはおろか、スカートもバッチリ履きこなしてる上、胸のあたりに詰め物をするため、悪くないどころか抜群なスタイルになっていた。

・トドメに、スカートから見える生足も妙に魅力的であった。

「え…嘘でしょ…あれが先生？」

「キヤー！素敵ー！！」

「私、こんな大人の女性になりたいな。」

「先生、結婚してくれ！ハッキリ言う！オレはゲイだー！！」

・女子も男子もすっかり真護に魅了され、男子の中にはとんでもないカミングアウトをする奴まで出てくる始末だ。

「ほら先生！鏡、鏡！！」

「お前ら…って、ええ！？これが、オレ…？」

・不覚にも真護は鏡に映った自分の女装姿に…。

「…。」

・心奪われ…。

「うがあああああ！！正氣に戻れ！オレ！！」

「せ…先生！？」

・…なかった、一歩手前で踏みとどまり、壁に『ガン！ガン！』と頭突きをして正氣を取り戻す。

「…HR終わり、先生は保健室に行くんで各自、後は自分達で決めるなりする様に…」

「…はい。」「」

・額から血を垂らす真護は生徒達にそう言い残して教室から出て行った（既に元の格好に着替え直してる。）

・保健室。

「痛たたた…バカなことやってしまった。」

・保健室の先生がいなかったために自分でケガを消毒する真護。

「…ったく、女装はよせよな…いくらなんでもあれは…ん？」

・呆れながら言う真護に、あるアイディアが浮かんだ。

「誰もいないな？変身！」

・周囲を確認した後、真護は何故かクウガに変身し、鏡を見ながらポーズを取る。

『…やっぱりこれはマズいよな？』

・どうやらこれが自分なりに考えた『仮装』らしいが、バカな考えを振り払って変身を解こうとした時…。

『なんだ…空が…？』

- 窓から外を見ると、空から大量の『何か』が町の方へ飛んでいく。

- 一方。

「あれは…!!」

(未来ちゃん!大変だよ…町が、桃月町が!!)

- 未来もこの異常に気づいた様だ、同時にサランダーからのテレパシーが伝わる。

「一体…何が起きてるの?」

- 未来は不安そうな表情で町の方を眺めていた…。

- 桃月町。

『キヤキヤキヤッ!!』

『キヤキヤキヤキヤ!!』

『キヤーキヤキヤキヤキヤ!!』

「うわあああ!なんだアレは!?!」

- 空から沢山現われ、町の人間を襲ってるのは、顔中に目玉がついた小悪魔の様な姿をした宇宙生物・グレムリン…さらには。

『ギギ…ギギギギギギ…』

『ギシギシギシギシ…。』

『ギギギギギギギギギギギギ…。』

「わあああああ！！化物だあああああ！！」

・地上を埋め尽くす様に大群で現われるのは軍隊アリを無理矢理人型にした様な宇宙生物・アントソルジャー。

・さらには。

『フン…弱い、なんて弱いのだ、地球人は！』

・腰までに及ぶ長い黒髪、髪で片目が隠した、浅黒い肌の美しい女性の上半身とは対照的に、下半身は大蛇の尾という異形の姿をし、地球に数々の神話に名を残した古代種級^{エンシエント}のカオティック・ラミア。

『コレナラバ、任務二支障八無イ…往クゾ、ラミア。』

・ラミアの隣りにユラリと現われた金髪のツインテールに、機械的な杖を携えた、闇よりも深い漆黒の瞳をした、動きやすさを想定された戦闘服を身に纏う少女…。

・この少女も人間ではない…『^{ホームンクルス}戦闘用^{ホムンクルス}人造人間』、与えられたコードネームは『N o . 1 2 (トウエルブ) 』である。

『チツ…そんなことは解ってる！！私に指図するな、人形風情が…！』

・ラミアは髪の間から覗かせる無数の眼をギョロつかせながらNo.12に向かって激昂する。

・常に自分を下に見る様な物言いをする『紛い物の生命（No.12）』の存在を非常に気に食わなく思い…いくら『同盟』を結んだとはいえ、古代より生きる誇り高き種族たる彼女のプライドが許さないのだ。

『サア…始メヨウカ…地球最大ノ侵略作戦ヲ…！ダガソノ前…』

・No.12は後ろを振り向くと…。

『リントゾ・ボソグンパ・パシサザ…！（リントを殺すのは我らだ…！）』

『ジョゴロボパ・ガセ！（よそ者は去れ！）』

『バラパプ！リバゴソギザ…！（構わん！皆殺しだ…！）』

・グロンギ達の群が…。

・今、地球に最大の危機が訪れた瞬間だった。

8 - 集結 - (後書き)

8…すみません、大丈夫です！冒頭に『夢才子』だなんて紛らわしいこと書きましたが、ちゃんと続きますので御安心を…（謝）

次回はクウガ最大の戦い…お楽しみに、柳雨でした

9 - 桃月町大乱戦 - (前書き)

約四ヶ月ぶりに再びこちらに舞い戻りました、今回の話にオリジナルのグロングイ怪人が登場致します

9 - 桃月町大乱戦 -

- 桃月町。

『行け！者共！！下賤な地球の蛮族共を叩き潰せッ！！』

『『『キヤキヤキヤキヤ！！』』』

『『『ギチギチギチ！！』』』

- カオティックの一人・ラミアの指示により、大量のグレムリンとアントソルジャーが自分達の地球侵略の障害となるグロンギ達を掃討すべく、一斉に飛び掛かる。

『ババセ！！（かかれ！！）』

『『『グオオオオオオオー！！』』』

- グロンギ達も負けてはいられないのか、それぞれ武器を片手に、獣じみた咆哮を上げながらカオティックの軍勢へと走り出す。

「わああああ！！化け物が暴れてるぞー！？」

「いやああああ！！」

- 一番悲惨なのは桃月町の住民達だった、彼らからして見れば、突如現れた怪物達が自分達を巻き込んで好き勝手に暴れまわってるもんだからたまったものじゃない。

『ククク…このまま暴れさせれば「地球の戦士達」も黙ってはおらんだろう！』

『「ソイツラ」モアプリ出し、倒シテコソ、初メテ我々ノ目標ガ達成サレル…。」』

・ラミアとNo.12の目的は地球侵略と同時に、地球を守る戦士…未来（クウガの存在は全く知らない）をおびき寄せ、それを倒すものだった。

「待ちなさい！」

『でス！！』

『来タカ…。』

・地球の免疫システム・エレメンタル属性の力で変身し、魔法の力を宿した少女・未来が相棒のサラマンダーと共に空を飛び現場にやって来た。

『ハッハッハ！！ついに来たか…地球の戦士よ！』

「ただちに戦闘行為を止めてください！」

『馬鹿力、貴様？我ラ、カオティツクガ人間ゴトキノ言ウコトヲ聞クトデモ…？』

・未来はなるべく戦闘は避けたいと思い、やめる様に言うが、カオティツク侵略者と戦闘種族が止まるはずもなく…。

『キャキャキャキャ！！』

『ボソギデジャス！！（殺してやる！！）』

『ギベー！！（死ね！！）』

・間髪入れずにグレムリンやコウモリ種怪人・ズ・ゴオマ・グ、コンドル種怪人・ラ・ドルド・グなど、飛行能力を持つ連中が次々未来に襲い掛かって来る。

『ダメみたいでスね…。』

「…仕方ないね！」

・やはり戦いを止められるはずもなく、諦めたサラマンダーに未来…彼女はバトンの様なアイテム・マジカルピースを取り出し、怪物達に向けるとバトンの両端から天使を思わせる光の翼が発生…。

『マジカルシュート！！』

『『グギヤアアアア！？』』

『『ホギヤアアアア！！』』

・弓の様に構えたマジカルピースから光の矢『マジカルシュート』が複数放たれ、未来に襲い掛かった連中が爆発と共に消し飛ぶ。

『中々ヤルデハナイカ…次ハ私が相手ダ！！』

『危ない！未来ちゃん！』

「…!?!」

・今度はN.O.12が未来に向かって飛んで行き、杖を構え、エネルギーをチャージし始め…。

『吹き飛ばせ!!』

「きゃあああああ!?!」

『未来ちゃん!!』

・慌ててシールドを展開はしたものの、極太のビームの威力に押し切られ、未来は墜落し、地に伏してしまう…。

「くっ…痛…い…。」

・未来は落ちた衝撃で腕や肩を痛めたらしく、苦悶の声を上げるが相手は彼女を待つてる暇もなく…。

『喰らえッ!!』

「くあああああ!!」

・防御さえも間に合わず、ラミアから放たれた火炎弾をまともに食らってしまった、追撃として尾で薙ぎ払われ、弾き飛ばされながら未来は地面を何回かバウンドし、倒れる…。

『どうした?お前の戦闘力はこの程度か?』

『ドンナモノカト思エバコンナモノカ?』

(この人達…強い…!)

・傷を負い、血が滴り落ちる左の肩と腕を庇う様に無事な方の腕で抑え、フラフラと立ち上がろうとする未来、しかし上手くいかない…。

『ダメだよ!一度逃げよう!』

・怪我の酷さにサラマンダーは泣きそうになりながら未来を止めた。

「でも…戦わないと…町がもっと壊されちゃう…。」

『賢明ナ判断ダナ…。』

『そうだ、お前が逃げれば我々は無く町を焼く。』

・しかし、未来は逃げる訳にはいかなかった、守りたい人達がいる町を好き勝手に蹂躪される訳にはいかないうから、何よりこんな邪悪な怪物共を放つてなどいかないうからだ…。

『この星の戦士は今ここで敗れ!そしてこの星と共に滅びるのだ!』

・得意気に嘲笑う様にラミアは高らかとそう宣言し、腕に炎を纏わせ、火炎弾を放つ準備をする…しかし。

「…それは違うよ…。」

『なんだ？何が違うのだ？』

- 未来はこの絶対的なピンチの最中、何の不安も曇りもない笑顔を浮かばせながら答えた。

「私『一人だけ』が戦ってる訳じゃないんだよ、私は信じてる…私もこの町も星も守ってくれる…そんな人がいるから…」

- 次の瞬間。

『ハアアアアアアア！！』

『ゲギョアアア！？』

『グギ！？』

- 激しいバイクのエンジン音と共に何者かが現れ、グロンギやカオティック達を次々と跳ね飛ばす…その者の名は勿論…。

「ね？クウガさん♪」

「待たせたな…！！」

・超古代の戦士・仮面ライダークウガ。

『ほう？データにはない新手的戦士か…面白い…。』

『貴様…何者ダ？』

『オレは…。』

・クウガがラミアとNo.12に名乗ろうとした次の瞬間…。

『クウガ！ゲビベプングサリーー！！（クウガ！積年の恨みー！！）』

『クウ…ガアアアア！？』

『「ええええええええええ！？」』

・いきなりどこからともなく現れたアリクイ種怪人・メ・アグリ・ダの不意打ちを食らい、最後まで名前を言い切れずに派手にぶっ飛ばされるクウガ。

『クソ野郎！人が決めてる時に何しやがる！？』

『グバアアアアア！！』

・キレたクウガは回し蹴りの要領で放つマイティキックでアグリを爆砕、改めて名乗る…。

『クウガ、だ。』

『なんかカッコ悪いッ！！』

・サラマンダーの指摘通り、殴られた頬をさすりながら名乗るクウガはカッコ悪かった。

（こんな者も戦士なのか？この星は…。）

（全クダ…。）

・呆れた様子でラミアとNo.12はクウガの阿呆な様子を眺めていた。

『…って！？おい！大丈夫か！！スマン！オレが遅れたばかりにそんな怪我させて…！！』

「だ…大丈夫です！」

『お前のせいじゃねーです、それに未来ちゃんだって戦えるし…。』

『後はオレに任せて君は…！？』

・怪我をした未来を見てうろたえるクウガ、突然殺気を感じ背後を振り向いた次の瞬間…。

『燃えろ！！』

『うばーっ！！』

「クウガさん！」

・ラミアの髪の間隙から覗く無数の眼が輝いた途端、クウガの全身が炎に包まれ、燃え上がる…。

「いやああああ！！クウガさん！！！」

『クハハハハ！ヨク燃エルナ！本当ニコイツハ戦士ナノカ？デハコレモ食ラウガイイ！！』

・続いてNo.12は左腕をキャノン砲に変形、エネルギーチャージを始め、プラズマ弾を発射。

『ギアアアアアア！？』

・トドメは…。

『『グキキキキキッ！！』』

『『クウガ！！』』

『ガア！？グア…アアアアアアア！！』

「嫌…やめて！！やめてえええええ！！」

・グロンギ・カオティツクの混合軍団による殴る・蹴る・噛みつきなどの集団リンチ、あまりの凄惨な行いに悲鳴を上げる未来…。

『くだらん茶番だったな…その戦士も…貴様の魔法も…所詮我々

と同類、我々の破壊の力と同じ力を持つ者同士だ。」

「違う…違う…そんなの違う…!!」

・痛めつけられるクウガの姿を見つめ、ラミアの言葉…自分達が全員同じ破壊の力しか持っていない同類と呼ばれたことに涙を流しながら否定する…。

・未来は元々病弱な女の子で、学校にほとんど来れなかったが、ある日サラマンダーと出会い、魔法の力を貰い、今までの病弱さが嘘みたいに回復した。

・自分に力を与えてくれたサラマンダー、そして力の源である地球を、クラスメートや最近やって来た教師（真護）、大切な存在を守るために使ってきたこの力をラミアから全否定されてるみたいで悲しかったのだ。

『綺麗事ヲ…物ヲ破壊シ、敵ヲ殺ス…ソノタメノ能力…何ガ違う…同ジ「力」ダ!』

・NO.12は否定する未来をさらに容赦なく否定、彼女を精神的に追い詰める…だが…。

『確かに…同じ「力」だな…。』

「クウガさん!？」

- 焼かれ、撃たれ、怪物共に纏わりつかれた状態で立ち上がる。

『だが、それは使い方を間違えればの話だ…その娘は間違った使い方なんてしていない…。』

『ほお？まだ動けたか？』

『待テ…!!異常ナ「力」ノ上昇ヲ観測…コレハ一体!?!』

- 動けるクウガにニヤリと笑うラミア、ここでN O・12が何かを感じた…。

『『クキヤキヤキヤツ!!』』』

『…つたく、人が決めてる時に…いつまでも人様の身体にしがみついてんじゃねええええ!!』

『『ギギエエエエエエ!?!』』』

- クウガの怒声と共に、気合いで吹き飛ばされた怪物共…そしてクウガのアーケルに埋め込まれたアマダムを通じて全身に電流が伝わり、あちこちに金のラインが輝き、脚に金の装甲・マイティアंकレットが装着され、クウガは『金の赤』の力の姿・ライジングマイティと化した。

「クウガさんが、金ぴかに…?」

クウガの自分達とは違う得体の知れぬ力に、『恐怖』というものを本能的に感じた…。

『覚えておいて欲しい。』

「は…はい…。」

・クウガは未来の近くまで歩み寄り、同じ『護る者』として彼女に告げた。

『…簡単なこと、正しい正しくないなんてのは君やオレの力の使い方次第だってこと、なあに…君は大丈夫さ!』

「あ…。」

・クウガに頭をワシワシと撫でられ…心に不思議な安らぎを覚える未来。

・クウガは実に不思議な存在である…敵に対して鬼神のごとき強さを振るう彼、しかしそんな彼は誰よりも優しい心を持つ戦士なのだ。

『お前だってスゲーじゃねーでスカ!まさかあんな力を持ってたなんて!』

「クウガさんはすごいです!!まるで本当のヒーローみたいで…。」

・サラマンダーと未来は瞳を輝かせて、素直に自分の思ったことをクウガに言う、だが…。

『はは…参ったな…でも…でも、な…。』

・何故かクウガの声はさっきまでの自信に満ちたものと違い、急に
悲しそうなものに変化し、信じられないことを言い出した…。

『オレは…ヒーローって呼ばれる資格なんか、無いんだ…。』

『「…え？」』

・二人はクウガの全くの予想外の言葉に全く理解出来ない様子である。

『オレは、そんな立派な奴じゃないんだ…例え何年経っても、何千何万と人から認められても…決して…。』

・そして心優しき守護者・クウガの言葉とは到底思えないワードが彼の口から零れる…。

『オレの犯した「罪」は消えない。』

「罪…!?!」

『まさか、敵を殺したことを言ってるんですか？けどそれは…!!』

・いきなりクウガが自分が「罪を犯した」などと言いだしたため、二人は敵を殺めたことを言ってるものと思ったが…。

『オレは…君達が思ってる様な奴じゃない…。』

・クウガはふと、「昔」を思い出す…今ではもう思い出したくはない、「昔の自分」を…。

・だが、それがいけなかった。

・昔を思い出してるクウガの『背後』に迫る『ジャララッ』という鎖の音に気づかず…。

『…え…？』

・気づく頃には時、既に遅く…クウガの胸から何かが『生えた』。

・否、『刺し貫かれた』…何者かによって投擲された、鎖で繋いである三ツ又槍トライデントによって。

『嘘…だ、ろ…ゲ…ハアッ…！！』

「クウガ、さ…え？」

・クウガの胸から溢れ出す鮮血、口から汚く吐き出される吐血…それが未来の顔や身体を赤く染め、地面に伏した瞬間…彼女の『見知った顔』がそこにあつた。

「結局…バレちゃった、な…。」

「か、神原…先生…！？」

（しまった！ダメージが強過ぎて、変身が…！！）

・未来の臨時担任・神原真護、クウガの正体を知って尚且つ未来に正体を黙る様に言われたサラマンダーには今の状況ではもうどうすることも出来ないことを悟る。

「先生…起きて、ねえ…起きてよ…先生…！！」

・未来は溢れ出す涙を拭いもせずに必死で起こすが、虚ろな眼になった真護はピクリとも動かない…。

『ボボデギゾバ…クウガ（この程度か…クウガ）。』

・ふと、そんな声が聞こえると同時に現れた何者かが鎖を引っ張り、真護に突き刺さるトライデントを乱暴に引き抜き手元に戻す。

・ズシン、ズシン…と足音を立てながら悠然と現れたソイツは頭・背中・腕にヒレをつけ、全身を蒼い鱗と強固な鎧で覆い、尾ビレを垂らしており、まるで神話に出てくる海神や海竜を彷彿とさせる姿をし、威風堂々とした態度で名乗り出す。

『我は、「究極の闇」の一角にして、グロンギの「王」の一人…。』

・グロンギが誇る最強最悪の存在・究極の闇…白き暴虐の魔王・ク
ワガタ種怪人ン・ダクバ・ゼバや破滅の獣王・オオカミ種怪人・ン・
ガミオ・ゼダと同じ存在…。

『我が名はツノガ…ン・ツノガ・ゼギ、グロンギを統べる「海王」
なり…。』

・恐怖の海王…タツノオトシゴ種怪人・ン・ツノガ・ゼギ…降臨。

9 - 桃月町大乱戦 - (後書き)

#9… 久々過ぎてこっちの作風完全に忘れてます、なんか変な感じだったらすみません(汗)そして長らく放置しててごめんなさい…

クウガやられ過ぎだなあ…しかしボツコボコにやられ、絶対的不利な状況に追いやられても、そこから立ち上がった時、クウガをはじめとしたライダー達は輝く…

ネタバレ?になるかも知れませんが、本作のクウガに変身するオリジナル主・神原真護は決して『英雄^{ヒーロー}』と呼ばれる人間ではありません、そして彼が告げた『罪』はグロンギなどの敵を殺したことはありません、それが何なのかを長めになりますますが次回で明らかにしたいと思います

オリジナルグロンギ・ツノガ、彼に関しては案だけ出来てましたが小説自体を放置したせいで出せず終いに(おい作者)、タツノオトシゴがモチーフですがモデルはネプチューンやシーサーペントなど海に関する神話の神や怪物です

次回は瀕死のクウガに異変… 柳雨でした

10・黒い感情・（前書き）

唐突に真護の過去話になります、そして現在では事態はさらにとんでもないことに…

10 - 黒い感情 -

- 26年前、桃月町の隣町・足柄町の大病院にて、一人の男の子が誕生した。

「すう…すう…。」

「わあ…ねえねえ！これが私の弟なの！？お父さん、お母さんっ！？」

「そうよ…凧沙、この子はの弟で、私達の新しい家族なのよ。」

- 病院の一室で、新しい生命かぞくの誕生にいたく感動した小学生の少女・かんばら・ナギサ神原凧沙は母・かんばら・エツコ神原悦子の手の中でスヤスヤ眠る生まれたばかりの弟の寝顔を見てはしゃぐ。

「かわいい寝顔だ…なあ、母さん、凧沙、この子の名前は何がいいかな？」

- この病院の院長であると同時に父親であるかんばら・ヒデアキ神原英明は眠る赤ん坊を見つめながら悦子と凧沙に尋ねた。

「そうね…うーん…。」

- そして三人で仲良くあーでもないこーでもないと話し合い、約30分後…。

「決めた、この子の名前。」

「ほう？なんだい？」

「ワクワク♪」

・二人の期待のこもった視線に応えるべく、悦子は我が子の名を紡ぐ。

「『真護^{シンゴ}』、この子の未来に出来るかもしれない、大切な何かのために『真に護る者』になるように…ね？真護♪」

「むにゃ…あう？」

「おー、イイ名前だなー母さん！」

「真護…ふふ♪あなたの名前は今日から真護ですよ♪」

・目を開いて不思議そうに三人を見つめる赤ん坊…後の神原真護は何がなんだか解らない様子であった。

・そして真護は優しい両親や姉の元で育ち、数年後、小学生になった頃。

「…むにゃむにゃ…。」

「真護♪おはよう♪んー♪」

「お姉ちゃん、おはよ…ん…。」

・中学生になった姉・風沙は弟・真護を起こすやいなや、いきなり彼の唇を奪ったが真護は慣れてるのか？ほとんど抵抗はない。

・実はこの『習慣』、最初は真護が赤ん坊の時…何を思ったか？弟を猫っ可愛がりする風沙が思わずおふざけで彼のおでこに口づけしたのがきっかけで始まった。

・二人が成長していくにつれ、風沙の真護への『愛』がますます深まってしまい、頬に移行し、ついには唇にと…事実上、真護のファーストキスの相手は実の姉ということになる。

・それ程までに風沙は弟を、真護もまた姉を愛してた…ちなみに二人は周囲からブラコン・シスコン姉弟と呼ばれてるが二人には馬の耳に念仏、まるで聴き入ってないという。

「…ハ！？私ったら…また実の弟相手に…いけない、いけない…コホン、朝食ごはんの時間よ」

「？はい」

・…風沙はどうやらいけない行為と解りつつ止められず、真護はよく解ってないようだ、顔を赤らめながらごまかす様に咳払いをしつつ真護と朝食を食べに行った。

・だが、この日…真護の人生ばかりか人格をも大きく狂わせる『悲劇』が起きようとは…この時はまだ彼らには予想だに出来なかった…。

「行って来ます！」

「走ると危ないから気をつけなさいよ！」

・神原姉弟は母・悦子の忠告をバツクに家から慌ただしく走って学校へと急ぐ…互いの手を固く握り締めて。

・しばらくして横断歩道に差し掛かり、青信号に切り替わっていつものように渡り出した時…。

「…え!？」

「…うiiiiい…ひつく…」

・真護が何かに気づくとそこには、猛スピードで赤信号を無視して突っ込む車がこちらに迫って来た、しかも運転手は顔を赤くしてハンドル操作がデタラメ…明らかな酔っ払い運転だった。

「真護ッ!!危ないッ!!」

「お姉ちゃ…うあ!？」

・風沙は咄嗟に真護を突き飛ばし…自分は…。

「…あ…。」

「ぐあああああ!？」

・気づいた時にはもう、悲鳴すら上げる暇も痛みを感じる暇もなく、鮮血を撒き散らしながら宙を舞っていた…同時に方向感覚を失った車は近くの電柱に激突、その衝撃で運転手がフロントガラスを突き破り、無数のガラスが突き刺さりグチャグチャになった顔で悲鳴を上げながら車から放り出され、即死…。

「うわああああ!？」

「女の子が撥ねられたぞ!」

「誰か!救急車だ!」

- 次の瞬間…周囲の人々は一斉に騒ぎ出し、慌てて救急車を呼び出す。

「お姉、ちゃん…?」

- 身体のおちこちが有り得ない方向に曲がり、アスファルトを血で赤く染め、虚ろな眼をしてる最愛の姉・風沙にフラフラと危ない足取りで近寄る真護…。

「真…護…よかつ、た…どこも怪我、してない…。」

- 虚ろな眼から涙を零しながら真護に向かって手を伸ばす、が…。

「ゴメンね…突き、飛ばして…ヒドイお姉ちゃんでごめんね…真、護…。」

- …手は落ちた…。

「え…?お姉ちゃん…?」

- …これが最愛の姉・風沙との余りにも早過ぎる『永遠の別れ』だった…。

- 救急車がようやくやって来たが全ての全てが遅かった…真護はただ人間の『死の概念』を理解し切れないくらい幼く、余りにも突然過ぎなことめ、何が起きたかが解らないがただ一つだけ何となく解る…『二度と姉は目を覚さないんだな』と。

- 病院。

「風沙！風沙アアアアア！」

「なんで…どうしてこんなことに…！？」

- 冷たくなった風沙^{むすめ}の遺体を抱き締めながら泣き出す英明と悦子、側では真護は何をすればいいか解らず、顔を俯かせていた…。

「…目撃者の話によれば娘さんは弟さんを庇って…。」

「なんと…！？」

「そんなことが…？」

- 事件を担当した警察官の話を聞いた両親は驚きのあまり絶句した。

「娘さんが弟さん突き飛ばさなかったら今頃…二人は…え！？」

「真護…！！」

「あう！？」

- 警察官が最後まで説明し切る前に英明は真護の頬に思い切り平手打ちを放ち、真護の小さな身体は地面を滑る様に転がる。

「真護！どうして黙ってた！？なんでだ！」

「それは…。」

「何故なの…何故あなたは生きてて凧沙は死んだのよ！？どうしてあの子が死ななきゃいけなかったのよ！！」

「…！！」

・全ての責任を真護一人に押しつけるように責める英明は怒りで冷静になれないのも気にせず彼の肩を乱暴に揺さぶりながら怒鳴りつけ、悦子もまた英明と同じく冷静になれずに頭を抱えながら泣き喚き出してまるで真護がいない子の様な言い方をし…。

「貴様が…貴様が凧沙を殺したんだアアアアアア！貴様が代わりに死ねばよかったんだ！！」

「返して！凧沙を返しなさいよオオオオオオ！！」

「…！？」

「お父さん！お母さん！落ち着いて下さい！！」

・…英明の言葉に完全にショックを受けた真護をさらにぶとうとした英明とヒステリックに叫ぶ悦子だが警察官に止められてしまう。

（僕のせいで…お姉ちゃん…死ん、だ…？僕は…なんのために助かったんだろう…僕一人が…悪いの…？）

・真護は近寄ったハゲ教師の顔目掛けてタバコを吹き出し、教師の鼻に命中し、軽く火傷した。

「人の耳元で…ギャーギャーギャーギャー…うるせえんだよッ!!」

「ひっ!?!や…やめ…ギャアアアアアアア!」

「きゃああああああ!?!」

・なんと、机を持ち上げてハゲ教師の頭に向かっていきなりそれを振り下ろした、突然の暴力に女子生徒達が騒ぎ出す。

「このクソ先公…偉そうにしてんじやねーぞ、ハゲが!!舐めてんじやねーぞコラアッ!!」

「ゲッ…ぐは…や、やめ…。」

「やめなさいよ!一体なんで…ゲボオッ…!?!」

・真護は怒号を上げながら頭から血を流すハゲ教師をマウントポジションで殴りつけ、吐血が彼の顔と拳を血で染める…凄惨な光景を見かねたクラス委員長の女子が止めに入った時、真護は立ち上がり、いきなり彼女の腹にパンチを叩き込み、鬼の様な形相で睨みつけた。

「女は殴らないと思ったか?甘いんだよ…ざけんなよ!コラアッ!邪魔してんじやねーよ!クソだらあッ!!」

「がふ…ごふ…誰か、助け…嫌アアアアアア!」

・ターゲットをハゲ教師からクラス委員長に変えた真護は彼女の髪

を乱暴に掴んで、気を失うまでその顔に何度も何度も拳を叩き込んだ。

「やめろ！神原！！」

「ペツ…じゃあな。」

「うつ…。」

- 騒ぎを聞きつけた教師達がやって来たため、真護はクラス委員長
の顔に唾を吐き捨てた後に窓を叩き割り、2階の教室から地面へと
飛び降りてバイクで逃走した。

- 校長室。

「校長！もうあの神原をこのままにしておけません！今まで何度我
が校の名前を傷つけたか…！！」

「即刻退学処分にすべきです！！アイツは我が校のガンです！」

- 校長に駆け寄る数人の教師達が真護を退学にするべきと直談判し
だしたが、校長は顔を曇らせて何も答えない…。

「しかもアイツは他の不良仲間とつるんで暴走族をやっていると聞い
てますよ！？今日も教師と女子生徒が被害に遭った！！もう限界で
す！！」

「…だが…この学校には神原の両親からの援助がある…それに噂で
は神原は暴力団との繋がりがあり、警察も我々も迂闊には手を出せ
んのだよ…。」

しかし様々な要因^{バックアップ}もあり、誰一人として真護を止められる者がいない…その悔しさと憤りに全員がハラワタ煮え繰り返る思いだったという。

・その夜。

「行くぞテメーら!!半端やつたらブチ殺すぞ!?!」

「「「押忍!!」「」」

「「「オー!!」「」」

「「「ヒャッハー!!」「」」

・真夜中の工場に昼間の狂行とは比べものにならない狂行をしようとする真護の号令の元に集まったのはエンジン音を吹かし、改造バイクに跨がるありとあらゆる服装や髪型をした不良共だった。

・関東最狂最悪の暴走族『^{クリムゾン}紅璃武蹲』、元は一つのチームだったのが次第にあらゆる暴走族やストリートギャングなどを傘下に治めた末に出来上がった恐るべき集団である。

・紅璃武蹲達は一斉にエンジンを吹かし、騒音を撒き散らしながら工場から出て足柄町を爆走しまくり、迷惑行為を行った。

『その暴走族!止まれ!!』

・当然警察も黙ってはおられず、パトカーを走らせて彼らを止めようとしたが…。

「ヒヤーツハツハー！！誰が止まるかバーカ！この警察が！！」
イヌッコロ

「ハツ！！！」

「な…何…？わあああああ！？」

・いつの間にかパトカーは周りを紅璃武蹲達に囲まれ、ドアを蹴られたり、バットやゴルフクラブで窓を叩き割ったりしたため、逆にパトカーが止められてしまった。

「死ねゴラアツ！！！」

「クソポリが！！！」

「『ギヤアアアアア！！！！』」

・さらにはパトカーから警官を引きずり出してリンチまで始めた、彼らには逮捕される恐れというものがまるでない、そのためパトカーや警官すら平気で襲えるのだ。

・毎晩毎晩好き放題に暴れ回り多くの者達を傷つけてきた…これこそが拭っても拭い切れぬ真護の『罪』だった。

（くだらねえ…ブツ壊してやるよ、何もかも…全部ツ！！）

「ぐああああああ！！！」

・真護はパトカーのガソリンを抜いて、ライターを投げ込み、全て爆発させて爆炎をバックに逃走した…。

・その後、彼らは各自解散…真護はバイクを自宅に停めて乱暴にドアをブチ開ける。

「真護…お前、また学校で暴れたな！？一体何考えて…」

「はあ？関係なくね？つつーか…どけよ、『クソ親父』。」

・英明は日々の息子の愚行を何度も注意したが、真護は一切聞き入れなかった…真護はあの日、『自分のせいで風沙が死んだ』と言われて以来、両親と完全に解り合えぬまま、彼は非行に走り、荒れた青春時代を送っていたのだ。

「し…真護…ご飯今出来…ひゃあ!？」

「遅えんだよ!『ババア』!！」

「母さん!真護…貴様アアアアア!ごぶツ!？」

・真護は両親を激しく憎み、やることなすこと全てが気に食わず、事あるごとに暴力を振るっていたのだ、それも軽蔑し切った、蔑んだ冷たい眼で見下しながら…。

「何が…何が気に入らない!？どうして私達を憎むんだ!！」

(…綺麗事抜かしやがって、つくづくヘドが出る…)

・真護は英明の言葉を無視し、鶏の唐揚げにマヨネーズをたっぷりつけて頬張り、勝手に卵を出して卵かけご飯を食い始めた。

「答え…ゴブツ!？」

「うつせえんだよッ！メシがマズくならあッ！！」

・真護は英明にコップをぶつけた上に、隠し持ってた鉄パイプで動かなくなるまで英明を殴りまくった。

「ハハ…ハハハハ…ヒヤハ…ヒヤハ…ヒヤハハハハハ！…ヒヤーハッハッハッハー！！」

「ガッ…グ…し…真…護…。」

・狂笑を浮かべながら英明を殴るのを止めない真護…。

「何故…こんなことに…あの頃はあんなに幸せだったのに…。」

・悦子はただただ無力な自分を呪い、父に暴力を振るう変わり果てた真護むすこを見て泣き出す。

「ケッ…調子こいてつからそーなんだよ…おい、ババア、金出してくんねー？映画行くんだよ…」

「お…お願い…なんでもあげるから…許し…！！ぎひいいい！！？」

「許す訳ねーだろ。」

・恐怖のあまり悦子は奴隷の様に従うしか出来ず、金を渡して命乞いするも結局殴られた…。

「次舐めた真似しやがったら…殺す。」

・真護はハッキリと、両親にそう告げた…。

・もはやこの男は完全に『壊れて』いた…時は流れ、現在…。

『脆弱…なんという脆弱な、貴様…本当にクウガか？』

・グロンギの『究極の闇』の一人…タツノオトシゴ種怪人・ン・ツノガ・ゼギは実につまらなさそうな表情を浮かべながら自分の武器であるトライデントを手元で弄ばせる。

「先生が…クウガさん…？」

・真護の正体を今の今まで知らなかった未来は今まさに命が消えかけてる真護を見て完全に狼狽していた。

「先生…先生！！起きて！起きてよ…神原先生エエエエエエエエ！！」

・未来は泣き叫びながら彼の復活を願う…そして…。

「先生…！よかった…え？」

・ゆっくり起き上がる真護の姿を見て安心したが、その『眼』を見て凍りつく…。

「…なんだか…周りがうるさいなあ…？」

「…！？」

・ 普段の真護とは明らかに異なるゾツとするような狂気のこもった眼、口の端を吊り上げた冷たい不気味な笑みを浮かべ、ゆっくり立ち上がる…。

「ハハツ…なんだ…黙らせるのなんて簡単じゃないか…。」

・ 誰に言い聞かせてるか不明な独り言に一人で納得している…一見滑稽な様子だが今の真護の得体の知れない恐ろしさが充分に感じられた。

「…みんな…『壊し』ちゃえばいいんだ♪ハハツ♪ハハハハ…♪」

『「…！」』

・ 壊す…真護とは到底思えぬ信じられない言葉に絶句する未来とサランダー。

「変…身…！！」

・ 構えを取り、アークルを出した真護の身体を黒いオーラが包み込み、その姿をクウガに変えた…しかし、その姿は未来達を知るクウガとは明らかに異なる姿をしていた…。

・ 金のツノが四本に増え、口元が鋭くなり、全身が刺々しく、血管の様に走る金のラインがついた漆黒の装甲に変化…そして何より、本来ならば烈火の如く赤いはずの『眼』が、深淵の闇を彷彿とさせ

る黒になっていた。

・超古代文明の種族・リントに伝わるクウガに関してこのような『警告文』がある…。

『聖なる泉涸れ果てし時

凄まじき戦士雷の如く出で

太陽は闇に葬られん』

・怒りや憎しみにとられ、聖なる泉…すなわち『優しい心』を失った時、クウガはグロンギの『究極の闇』に等しき『凄まじき戦士』と変わり果ててしまう…。

『ハハハハ…アハハハハハッ！！ヒャーハッハッハッハッハッハ
ー！！！！』

・『究極の闇』に飲まれた黒き魔人…仮面ライダークウガⅡアルティメットフォームが覚醒した瞬間であった…。

10・黒い感情・（後書き）

#10…本作を読んでは皆様…多分絶句しておりますよね？『誰？この人』『何これ？どこのクローズ？』…私自身もそう思います

前回彼が語った真護の罪とは昔のとてもない不良ぶりのことです、不良な真護は月刊チャンピオンの漫画や映画にもなった品川ヒロシ作の小説『ドロップ』をイメージしながら書きました（おい！）、映画にはメインの人物役になんと、仮面ライダーカブト/天道総司役の水嶋ヒロさんが出ておりました、クールな天道のイメージとは明らかに掛け離れた『ドロップ』の中でも最凶最悪の不良・井口達也役のハマリ役ぶりに私も啞然としました…誰？この人、怖い…

本来クウガとは本家クウガの主人公・五代雄介やデイケイドの小野寺ユウスケの様な優しい心の持ち主になれるはずののですが、真護の場合は彼らは勿論、クウガに変身出来る様な人物像から到底掛け離れた人物をコンセプトにしました…『元ヤンクウガ』なんて考えたのは恐らく私だけでしょう（汗）

喫煙は当たり前、学校で大暴れ、女も殴る、評判・素行最悪、暴走族、実の親を半殺し…徹底的にクウガの変身者から掛け離れた奴にしてるうちに頭痛くなりました…お姉ちゃんっ子でかわいい頃の彼は一体どこへ…？子供は受け身の立場ですから親の心ない言葉で傷つくものですがこれはヒドイ…

そして現在…死にかけた状態から復活、ただしアルティメットとして、あの頃芽生えた『黒い感情』は完全に払拭したわけじゃないのです（汗）

次回はアルティメットクウガが暴走します、それでは、柳雨でした

P・S・真護のプロフィールも更新しました、よろしければ御参考にどうぞ

キャラプロフィール（前書き）

本作の主人公にして仮面ライダークウガであるオリ主・神原真護の
プロフィールです

尚、ネタバレを含んでいるため、閲覧の際はご注意ください

キャラプロフィール

かんばら・シンゴ
神原真護

イメージCV：伊藤健太郎（『BLEACH』：阿散井恋次役、『機神咆哮デモンベイン』：大十字九郎役、『NEEDLES』：照山最次役、『トランスフォーマーアニメイテッド』：ラグナッツ役など）

年齢：26

容姿：昔↓赤黒く染め上げた長髪、獣の様にギラついた眼

現在↓黒髪、イマイチ冴えないパツとしない顔（だが悪いわけではなく、比較的顔は良い）

性格：昔↓とにかく狂暴、すぐキレては意味も無く女子供・老人問わず、相手を殺す勢いで殴りつけた

現在↓穏和で優しく、面倒見が良いが、完全に丸くなったわけではない…キレル時はキレル

桃月町在住の非常勤教師、面倒見が良く、社交性があり、初めて会った生徒達とでも馴染みやすい

桃月町の隣町・足柄町の大病院で医師をやってる夫婦…父・神原英明、母・神原悦子の間にて誕生、ファーストキスの相手は最愛の姉・神原凧沙、姉弟仲はともよく、真護本人も幼いながら彼女を愛し、凧沙もまた彼を猫っ可愛がりするくらい愛した（二人は周囲から『

シスコン』『ブラコン』呼ばわりされたが二人は全然お構いなし)

しかし真護が小学生になったばかりの頃のある日、風沙は真護を酔っ払い運転の暴走車から庇って事故死：この時両親が真護に言い放った心無い言葉が原因で傷つき、彼自身の人格やその人生の大半を大きく歪める『黒い感情』が芽生えることになった

その反動から中学・高校と、とんでもない不良に成り下がり、しまいはいくつものグループを傘下に治めた関東最大最狂の暴走族『クリムゾン紅璃武蹲』の総長にまで登り詰めた

暴力に常に餓え、毎日の様に両親を虫けらのごとく痛めつけては金をむしり取り、奴隷の如く扱った

仲間と狂った獣の様に暴れ回る荒んだ青春時代を送り、警察やヤクザさえも避ける程の危ない男だった：

こういった色々と混み合った経緯もあったが、どういうわけか教師の道を目指し、次第に初めて人間らしくなり、後にひょんなことからアークルを見つけてクウガになり、警察と協力しながらのグロンギ達との戦いに明け暮れた

名前の由来は、近い未来に出来るかもしれない、大切な何かのため『真に護る者』になって欲しいという両親の願いが込められている

好きなものは卵料理全般(特にカニ玉)、卵かけご飯には並々ならぬこだわりがある、趣味はバイクに登山、昔は喫煙や飲酒をしてたが現在では酒は付き合い程度しか吞まず、昔の自分を思い出すためタバコ自体が嫌いになった上に喫煙者も嫌いになった

11・小さな救いの手・（前書き）

またまたスランプ期に陥り、ようやく投稿…グダグダかつ意味不明な内容かもしれません（汗）

11・小さな救いの手

『ヒャーハッハッハッハッハアアアアアアアー!!』

・瀕死の重傷を負ってしまったはずの真護が突如起き上がり、再び変身した…しかしそれはもう元の優しい小学校の先生である『彼』ではない。

・今の『彼』は仮面の中で邪悪且つ狂気に満ちた高笑いを上げながら、闇の如き『黒い眼』で周りを見つめる『究極の闇』と等しき存在と化してしまった黒き魔人…仮面ライダークウガⅡアルティメットフォーム、それ以上でもそれ以下でもなかった。

『ほほう？その姿は…ん？』

『クウガアアアアアーツ!!』

・ゾノガが何やら興味深そうにクウガUFの姿を眺めると、クウガUFの放つ並々ならぬ狂気や殺気に当てられ、引き寄せられるかの様にウツボカズラ種怪人・ズ・ガズボ・デとアンコウ種怪人・メ・アゴン・ギが飛び出し、二人掛かりで襲撃を仕掛ける…が。

『邪・魔・だ』

『ギャガアアアアア!?!』

『ギヒイイイイイ!?!』

・ガズボとアゴンは割とアッサリと、喋ることは出来るがやはりどこか狂った口調のクウガの放った『たった一発のパンチ』で宙を舞う…そして何度か地面をバウンドし、滑る様に転がるのが止まった瞬間…。

『ゲボツ…!!』

『ゴボオツ…!!』

・有り得ない量の血液を口から噴き出し、全身を痙攣させる…そして二体の顔に『影』が差し掛かり…。

『ヒヤッハアアアーツ!!』

・その『影』とはいつの間にか地面を離れて跳躍し、ガズボとアゴンの顔面目掛けて両脚を突き出し、着地しようとしているクウガのものだった。

『『ヒ…!!?』』

・悲鳴を上げる暇もなく、踏み潰されたガズボとアゴンの顔面が弾け飛んだ後、大爆発が巻き起こり、二体は消滅した…先走ったための哀れな末路であった。

『アハハハハ…アッハッハッハッハッハッ…!!』

『クハハハハ…!!なるほど…貴様、「目覚めたな」？我と同じ存在「究極の闇」として…。』

・狂った高笑いを続けるクウガを見て、その強さを確認出来たツノ

ガは実に愉快そうに笑った。

（ククク、そうだ…こうでなくては面白くない！余分な感情を全て捨てた、100%戦うだけの存在…究極の『生体戦闘兵器』になった貴様との戦いは実に血がたぎる…！！）

・ツノガはどうやらアルティメットの力に目覚めたクウガとの戦いを強く望んでいたらしく、手下のグロンギ達からは解らないが、ツノガ自身は強者…否、『狂者』との対峙によって武者震いしていた。

『ギチギチギチギチ！！』

『クキヤキヤキヤ！！』

『チイツー！！宇宙^{ソラ}から来た奴らか…邪魔だアツー！！』

『『ギヒヤアアアアアアアア！？』』

・ツノガはまだ残っていた力オティックの尖兵であるアントソルジヤーとグレムリンの大群が迫って来たため、クウガとの戦いを邪魔されたので激怒し、大気中の水分を使って生成した無数の氷の矢を飛ばして殲滅に取り掛かる、それを見たクウガも…。

『いいねえ…ソレ、オレにも殺らせるよ！ヒヤアツツハツハツハツハ！！』

・クウガはツノガが力オティック達を殺すのに感化され、自らも掌をグロンギや力オティック達に向けてかざして『ある技』を披露した…それは。

『ハアアアアアア…ハッ!!』

『『ウギヤアアアアアア!?!』』

『『ギギエエエエエエツ!?!』』

『『ヒヤアアアアアアアッ!?!』』

・唐突に怪物達の身体から炎が発生し、全身が業火に包まれ『燃え出して』、熱さに耐えかねてもがき苦しみながら踊り狂い、やがて全員灰と化してしまったのだ…。

・これぞクウガUF最強の固有能力…周囲の物質の原子・分子の操作することによって一瞬でその『対象』となった相手をプラズマ化させて発火・炎上化させてしまうことが出来る『超自然発火能力』である。

『ヒヤハハハハハ!!まるで火が踊ってるみたいだぜ!!ヒヤッハッハッハッハッハ!!』

「…違う…違う!!…こんなの、こんなの先生じゃないよッ!!」

・未来は変わり果てた姿のクウガを見て涙をボロボロ流す…確かに彼は戦闘時には鬼神の如き強さを誇るが、自分に見せてくれたあの優しさは嘘ではないはず…。

『…未来ちゃん…アイツを元に戻す方法ならあるでスよ…。』

「本当!?!サラ君!!」

- 『元に戻せる』、サラマンダーが告げた僅かな可能性きぼうの存在に未来は喜んだ…しかし。

『…だけど、これは同時にすごく危険な「賭け」でもあるんだ…君は、それでもアイツを…クウガを助けたいでスか？』

「…それでも…。」

『…。』

- 『危険な賭け』、それは未来にも何らかの影響が出る…そういう危険性がある言葉、しかし未来の返事はもう既に決まっていた。

「それでも！私は先生を助けたい！！」

『…そう言うてくれると思ったでス、んじゃ早速。』

「へ？わっ！？私燃えてる！！」

- 未来の揺るがない決意を表す言葉を聞いてサラマンダーはニコリと微笑んだ直後、自身の身体の形が崩れ、巨大な火の玉となり、未来の身体の中に入ると同時に彼女の身体が燃え出した。

『大丈夫！見た目はヤバイ感じだけどそんな熱くないから！！そんなじゃ、クウガに向かって突撃するでス！！』

「突撃！？それただの特攻…もう気にしてられない！やあああああぁー！！」

- 半ばヤケクソに近い形でクウガに向かって突撃を開始した未来であつた。

- 一方…。

『ヒイイイイイ！！』

- 先程の大量虐殺を見て、No.12は完全に恐怖に支配され、もはや地球侵略の任務など頭に無く、サツサと逃げ去ろうと空を飛ぶも…。

『カトンボが…五月蠅過ぎるわ！』

『アハハハハ…その通りだな！！』

- 何故か意見が一致したツノガとクウガは、逃げるNo.12に向かって手をかざし…。

『ゲボツ！？ガハアアアアア！！』

- ツノガは氷の矢で刺し貫き、クウガは超自然発火能力で燃やし、始末した。

『勝負に邪魔物など不要…これで貴様と…ん？』

- グロンギはツノガを残して全滅、カオティックも残らず全滅、邪魔物が無くなりクウガとの戦いに専念出来ることに喜ぶツノガが言いかけた時…。

『「ハアアアアアア！！」』

『は？グオアアアアアアア！？』

『何イツ！？』

- なんと、全身が炎に包まれた少女…否、未来がクウガに向かって突撃、瞬間、大爆発が起き、あまりの予想外の出来事にさすがのツノガも驚愕する。

『グガアアアア！！ギャオオオオオ！？』

(…奴らの姿が無い！？砕け散ったか？)

- 燃え上がり悲鳴を上げながら踊り狂うクウガを見たツノガ…彼が指摘する様に、未来の姿が無い…しかしこれが未来とサラマンダーの狙いだった。

- 二人の作戦…それは『究極の闇』に支配された真護の心を直接呼び起こしに行くというとてもないものだった。

- 真護の精神世界に飛び込むなどとそんな目茶苦茶なこと普通は無理なのだが、そこで出番なのが地球を司る精霊の一人・サラマンダーの魔法の力である。

- 火の力を最大限まで出してそれをパートナーである未来に纏わせ、半ば特攻という形でクウガの精神世界に入りこませることに見事に成功した…しかしサラマンダー曰く『突撃した後、下手したら粉々になったまま元に戻らないかも』とのこと、危険な賭け以外でも何者でもない…。

『うばお おおお！？』

『何が…何が起きてる…！？』

・状況を把握出来ぬヅノガはただただ狼狽するだけであつた…。

・クウガの精神世界。

「ここが…先生の心の中？なんだか、暗くて不気味だね…。」

『ここまで闇に侵食されているとは…。』

・未来とサラムンダーは周囲を見渡すとそこはただ闇・闇・闇…無限に広がる闇の中…。

「早く先生を見つけて起こそう！」

『そつでスね、急ごう！』

・闇に侵食されてる真護の精神世界の雰囲気^{バートナー}に気圧されそうになりつつも、二人はただひたすらに走るだけであつた…。

「あ、足元がやたらドロドロするんだけど…？」

『…まったく！どんだけ精神弱いんだよッ！？世話の焼ける奴だなッ！…！』

・ただ地面を歩いてるのにまるで粘度の高い泥を踏む様な奇妙な感触に違和感を覚える未来…サラムンダーはつくづく自分の未来^{バートナー}を心配させる真護の精神の脆さに腹が立った。

・さてさて…二人がしばらく進んで行くと、一際広大な、瘴気が漂う黒い沼みたいなものがある部屋が見つかった。

『相当病んでるなあ…この魔界のどこかにアイツがいるから引つ張り出してあげよう、未来ちゃん。』

「先生の心を魔界とか言わないでッ！先生…どこなの？先生！先生エー！！」

・サラマンダーの身も蓋も無い発言に未来はツッコミを入れつつも、真護を探し出すと。

「…。」

「先っ生ー！？」

『これは無いわ…。』

・沼に沈みかけてる真護を発見…しかし何故か彼は犬。家の一族みたいに脚を逆さまにした状態だったため、大層驚かれた。

「先生ー！！しっかりしてー！！」

『うへえ…ベタベタするでス、コイツ…ばっちい。』

「…ばっちい言うな！！」

・二人はどうにか引き上げ様と彼を引つ張り、下半身をひっくり返して上半身のみを出し、呼吸が出来る様にする…目覚めた真護は瞬

時にサラマンダーの汚物発言にキレた。

「先生！大丈夫ですか！今引き上げますから！！」

「す、鈴原…どうやってここに…？」

『ボクの魔法の力でス。』

「魔法便利だな、オイ！！」

…と、こんなやり取りをしながらゆつくり引き上げられる真護。

「…先生、あなたがクウガさんだったんですね、人知れずグロンギや宇宙人達と戦って、私達を守ってくれたんですね？」

「…まあ、な…。」

…正体は最後まで彼女に隠し通すつもりだったが、ツノガの襲撃の際に変身が解けて全てがバレてしまった…しかし、未来の表情は異形を畏怖するそれではない、むしろ彼を安心させる様な優しい笑みを浮かばせていた。

「お前こそ…正体解らないと思ってたか？オレは一目で丸解りだったぜ？無茶ばかりしやがって…。」

「ふえ！？知ってたんですか！？お、お互い様ですよ！そんなの！！」

「いたた！？やめろ！沈む！！」

…最初の出会い、魔法で変身してたが服装が変わっただけで後は未

来の顔そのものだったため、真護は一目で解った…未来は顔を赤らめ真護をポカポカ叩く。

「…それでも、今までありがとう、先生…。」

「…鈴原、お前も頑張ったな、今もこうして助けに来てくれてありが…!？」

- 形はどうあれ、互いに感謝を表わした二人、真護がもう少しで岸に上がれそうな時、真護は急に身体を何かに強く引っ張られる…その何かの正体とは…。

『誰がテメエを上がらせるかよ! バアーーーーカッ! ヒャーッハッハッハッハアーツ!』

「お前は!?! ガボツ!」

「先生!?!」

- …それは、闇よりも濃い黒眼を^{ブラックアイ}ギラつかせたクウガ「アルティメットフォーム」だった、クウガUFはゲラゲラと狂笑しながら真護の頭を掴んで沼に引きずり込もうとする。

『バカな…何故ここにクウガが…?』

『違うな…言うなればオレはコイツの薄暗い心の「闇」の代理人さ…!! 残念ながらコイツは渡さねえぜ? オレと一緒に壊しまくるんだ!! 何もかも全て!! ヒヤハハハハハ!』

- どうやらこのクウガUF…闇クウガは真護の心の闇のイメージが

具現化して姿形を得たものであり、真護を真に闇に堕とそうとして
いる張本人らしい…自分の最大の敵は自分自身のようだ。

「な、なんだか解らないけど！あなたも先生なのね！？だったら何
故先生を苦しめようとするの！？」

『ヒヤッハッハッ！！これはお笑い草だ！何にも知らないときてる
…オレはコイツとは長い長い付き合いなんだ…「昔」からな』どれ、
見せてやるよ…コイツが本当はどんな人間なのかをよお…！』

「や、やめろオオオオオオッ！！」

・闇クウガは真護の「昔」を知らない様子の未来を見て、止めよう
とした真護の叫びを無視しつつ、彼女の頭に手を置き、「何か」の
イメージを流し込む…。

「…え…？」

・未来は自分の頭に流れる真護の過去のイメージに絶句する…。

・未来の瞳や頭に映るのは壮絶なものだった…姉の死とそれを両親
に責められる一人の少年…。

・その彼が成長し、一変した狂暴な顔つきと赤く染めた髪…非行に
走り、両親・同級生・教師・警官などを傷つけ、暴走族を率いて爆
走や抗争、度重なる暴力事件でついに逮捕された瞬間など…。

・壊れに壊れまくった一人の男・神原真護の過去をこれでもかとい
うくらいに見せつけられた。

『どうだ？失望したる？ヒヤッハッハッハ！コイツは！コレ』は本来そういう男なのさ！ヒヤハハハハハ！！』

⌈
:
!
!
⌋

- 狂った嘲笑を響かせ、未来に真護が本来どんな人間なのかを教えた闇クウガは実に愉快そうだった、一方真護は抵抗を止めた…。

（バレてしまった、もう…このまま、沈もう…。）

- 眞護は未来の反応が怖かった、過去の決して拭い切れない悪行の数々がバレた……何か言われるくらいならいっそ闇に沈む方がマシだ……そう思った時。

「……先生！今……今助けるから！」

「な……!？」

しかし予想外なことが起きた、未来はあんなものを見せつけられ
たにも関わらず、真護を救おうと小さな手を伸ばし、必死に引っ張
り上げようとしている…このことに真護と闇クウガは驚愕した。

『何故だアアアアア！？有り得ない！有り得ない！有り得ない！有り得ないイイイイイ！何故こんな奴を助ける！？お前コイツに失望したんじゃ……！！』

- 闇クウガはあんなケダモノじみた真護かこの本性を見せつけたにも関わらず、それでも尚助けようとする未来の行動が信じられなかった。突き放すならまだしも助けようとするなど断じて有り得ない。

「…見えたものは悪いことばかりじゃない…!!」

- 未来はほんの少しだけ見えた光景…真護最愛の姉・風沙を失った時の幼い彼の悲しみの涙が、真護が未来に見せてくれた彼の優しさは決して偽りではないことを表わしてたことを見抜いたのだ。

「いつも助けられてばかりだったから…!!」

『…!?!』

- 小さな手に力を込め、信じられないくらいの力で真護を引っ張る…その力は闇クウガすら凌駕していた。

「今度は…私が助けるんだッ!!」

『おっしゃー!行けー!!未来ちゃん!!』

「…鈴原!」

『う、嘘だろ!?チクシヨオオオオオオオ!!こんなバカなアアアアアアア!!』

- 未来はサラムンダーに応援されながら真護をついに闇クウガから引き離すことに成功した…闇クウガは悔しさのあまりに絶叫を響かせた。

『クソがアアアアアアア!!だが忘れるなよ!オレはソイツ自身で!ソイツはオレ自身だ!いつか必ず闇に堕としてやる…!!』

- 闇クウガはそれだけ言うと黒い沼に沈み、三人も精神世界から消

失した…。

・そして現実世界で…。

『ガハ…ハア…ハア…！』

『「わあああああ！？」』

『な…何事だ…！？』

・身体を焼く炎は消えたが、息を荒げて地面に手をつけるクウガU
Fの様子と彼の身体からいきなり排出された未来とサラマンダーを
見てツノガは驚いた。

「…先生…あの…。」

・未来は不本意な偶然ながらも彼の過去を垣間見たことを謝罪しよ
うとしたが、クウガは手で制した。

『もういいさ…そのことは気にすんな…やっぱ弱いな、オレって奴
は…。』

「先生…？」

・クウガの眼…闇の黒が鮮やかな炎の赤に戻ると同時に、仮面の下
の素顔から真護は自身の眼から涙が零れ落ちるのを感じ取る。

『人を助けていい気になって、本当に救って欲しかったのが自分
自身だったなんてな…笑えねえよ…。』

・仮面をつけてる故に拭えぬ涙で視界が滲むがそれすら耐えて、クウガはツノガに向き合う。

『待たせたな？』

『フン…構わぬ。』

・クウガは拳を固めながら、ツノガはトライデントを構えながら、臨戦体制を取る。

「…先生、負けないでね。」

『…もちろん！』

・クウガは未来の声援を聞き、彼女の頭を優しく撫でながら、その期待に応えるべく、最後の戦いに赴いた。

『『うおおおおおおおおお！！』』

・真の闇の支配を抜け出したクウガ、強大な究極の闇であるツノガ、最終ラウンドが今、始まる…。

11 - 小さな救いの手 - (後書き)

11…すっかりまた御無沙汰した本作、いつもより長くなりました(汗)

大虐殺シーンは書いてもうクウガじゃない何かに見えてきました、純粋なファンの皆様ごめんなさい…

未来が火の精霊・サラマンダーの力を借りた精神世界への突入…元ネタはウ。トラ。イナ。イトです(おい作者)

闇に満ちたドロドロな精神世界に黒い沼に真護の心の闇の代理人・闇クウガ…ドス黒いものばかり(汗)

何を伝えたいのか書いてる私にすら意味不明な内容ですみません…『本当に救いを求めてたのは真護自身』ということを表わしたかったのですが、作中での描写が下手過ぎる(泣)

次回はツノガとの決着、それでは、柳雨でした

12・負けてたまるか・（前書き）

連続投稿になります、バキバキボカボカ、血が飛び散りまくりな殴り合いによる決着！

12・負けてたまるか・

『うおおおおおおおおおお！！』

・激突するは二人の異形の戦士達…。

・一撃一撃が確実に相手を倒さんばかりの勢いとその威力を秘めた拳を振るうクウガIIアルティメットフォーム。

・必殺の殺傷力を秘めたトライデントを休むことなく振るって攻撃を仕掛けるン・ツノガ・ゼギ。

・攻撃・回避・防御・攻撃・回避・防御…それらの行程を何度も何度も繰り返し、互いに血液を飛散させるも、決して止まらない…もう誰にも止められない…。

(先生…！！)

・未来は必死に祈った、この二人の戦いには自分が入ることは出来ない、邪魔をしてはいけない戦いだと解っていたから…ならば自分が出れることは無事を祈ることだけだった…。

『ふはははははは！！いいぞ！！もつと足掻け！我を殺してみろ！
人間^{リント}ツ…グボオツ！？』

『グツ…！！言われなくても勝つつもり…いや、勝たなきゃならないんだよッ！それよかあの世への祈りは済んだのか！？グロンギイッ…！！』

・ツノガは高笑いをしながらクウガを攻め、またクウガも勝利への決意を強めながらツノガを殴る。

・目まぐるしいスピードでの接近戦もやがて終わり、二人は距離を取る。

『死ねエエエエエ！！クウガアアアアアアア！！』

『誰が死ぬかよ！クソだらああああああ！！』

・ツノガは何百・何千発もの氷の矢を絶えることなく生成しながらとんでもないスピードで休まず飛ばすが、クウガもまた素直に殺されたいと思うはずもなく手をかざして超自然発火能力で飛んで来る氷の矢を片っ端から消滅させる…。

『何発撃つても無駄か…ならばこっぴうのはどうだッ！？カハアアアアアアアッ！！』

『ぐおあああああ！？』

・ツノガは急に攻撃手段を変え、口から吹雪を吐き出したため、クウガは防御を取るも足元から徐々に下半身へと凍結が進み、胴体まで近づく…このままではタダの氷像になってしまう。

『な…舐めんなやアアアアアアア！！』

『なんとッ！？貴様自分から…面白い！やはり貴様は面白いぞッ！』

『お笑い（ギャグ）のセンスは無い方だけだな！！』

- しかし、クウガは自分自身に超自然発火能力をかけて凍結された部分を溶かす…自らの身がその業火に灼かれることすら厭わないのを見たツノガはグロンギ特有の闘争本能をより熱くたぎらせた。

『もつとだッ！！もつと我を楽しませろ！！』

『お前を楽しませるためにやってんじゃねえんだよッ！！オレは…！オレはアアアアアア！！』

- 戦いの快楽を心から楽しむツノガとは対照的にクウガは彼に嫌悪感を抱き、心の底から…自分の名前と同じく、『真に護る』と決めた大切な者達のために、この勝負は絶対に…。

『負けて…られないんだよオオオオオオ！！』

『ゲボッ…ゴハアアアアア…！？』

- 韋駄天の如く大地を駆け、ツノガの顔面に渾身の一撃をブチ込むクウガ…ツノガは口から鮮血を吐き出しながら宙を舞い、地面を転がった、その際愛用のトライデントが回転しながら地面に突き刺さる…。

『ウルウアアアアアアアアッ！！』

『…チィッ！？シャアアアアアアアアッ！！』

『がはあああああああッ！？』

- クウガはツノガを起き上がらせる暇も与えずに飛び蹴りを放つも、ツノガは身を翻らせて回避…クウガの蹴りは虚しくアスファルトを

砕いただけ、起き上がったツノガの反撃の蹴りを腹にモロに食らい、先程のツノガと同じく口から吐血する…。

『ゴブ…がああああ…!!』

「うっ…!!」

『未来ちゃん…無理しないで…。』

- 痛々しく血を吐くクウガの姿を見て全身をうち震わせる未来はまるで自分も殴られたかの様な感覚に囚われる、そんな様子を見てサランダーは彼女の気持ちを和らげようと勤めたが…。

「大、丈夫…だから、私は…目を逸らしたくない…逸らしたら…先生の必死な想いを裏切ることになるから…!!」

- 自分のために、生きとし生ける者達全てのために戦うクウガの悲痛なまでの全力全開の戦いから目を逸らしたらきつと後悔する…この戦いを見届けるにはあまりにも幼過ぎる精神が何度潰れかけたか、しかし、彼女は折れない。

「きつと…先生は、勝てるから…!!」

- 彼の勝利を信じて…。

『ンガアアアアアアア!!』

『…有るか!そんなのツ!?ぬがああああああ!!』

- なんと、ツノガは近くに停まっていた自動車を持ち上げ、クウガ

きている、ただ全身がガタガタだったが、激痛をもひたすら耐えながらツノガは力任せにポストを引き抜いてクウガの頭を殴りつける。

『ンギギ…だりゃああああああ！！』

『ぶべらッ！！ゴハ…ギギイイツ！？』

・クウガも負けじと道路標識を引き抜いてツノガの顔を何度も何度も殴りまくる。

『ぜえぜえ…おらあああああああ！！』

『はあはあ…ドラアアアアアアア！！』

・いくら人外といえど互いに命あるもの…限界が近いのか？二人共足元おぼつかず、立つのすらやつとな状況の最中…相手を殺す云々よりもただひたすらに『負けられない』という意地とプライドのみを原動力に変えて、素手の殴り合いを開始した。

『ウラアアアアア！！がふっ！？ゲッ…ぐああああ！！ダアアアアアア！！』

『グオラアアアア！！ゲハッ…ブゴアッ！？ギヤアアアア！！シエエエエ！！』

・疲労もダメージも限界を超えてるはずの身体を決して止めずに二人は拳に持てる限りの力を込め、腹に、顔に、重い一撃一撃を確実に叩き込み、吐血で地面や自分、相手の身体を濡らす…。

・最早これは戦いというよりも『喧嘩』…それもスケールのドでか

『でりゃあああああああああ!!』

『ギギ…アアアアアアア!!』

・そしてとうとうマイティからツノが小さく純白の身体を持つクウガのフォーム中最弱のスペックを持つグローイングフォームにまでダウンしてしまい…。

『…!!?』

「先生!!」

・クウガのキックはついに止まり、地面に墜落してしまう…。

『…。』

『…ここまで…か…。』

・ツノガは自分の身体からグロンギヌススパアーを引き抜き、構えながらも動けないクウガに向かってそれを無情なまでに振われ、クウガは眼を閉じた…。

・だが…。

『グッ…!!…なん…だ…?』

・いつまでも『死んだ』という感覚が来ない…傷ついた身体を震わせ、恐る恐る眼を開けるとグロンギヌススパアー自体はクウガの頬スレスレに突き刺さってるだけで、クウガは無傷だった。

『…私の負けの様なな…ウゴボオオオオ…!!』

『…オイオイ、勘弁してくれよ…ただでさえ血塗れだったのに…。』

・ツノガのおびただしい量の吐血を顔中に浴びながらも拭う余力すらないクウガはただただ彼の『最後』の様子を見つめる…。

『フフ…ふはははははは…ハハハハハハハ!! 我は満足した…我を楽しませた貴様に、その槍を…くれて、やる…!!』

『…くれるんなら、もらってやるよ…だから、安心してもう逝って来い…。』

・ツノガはよほどクウガとの血戦が気に入ったか、狂った笑い声を上げながらせめてもの礼のつもりか、自分の愛槍・グロンギヌスピアをクウガに渡した後、彼から離れる…。

『最後に…貴様の、リントとしての名を聞こう…!!』

『神原真護…真に護る者と書いて真護だ…あの世逝っても忘れんな…よ…』

・ツノガのリクエストに応え、クウガはリント…人間としての名前を明かした。

『真に護る者…ハハツ…なるほど…貴様に相応しい名だな…さら…ば…だ…神原真護…クウガよッ!!』

『…。』

- 最後に真護の名前を読んだ後、ツノガの肉体が大爆発を起こした
…海王・ン・ツノガ・ゼギの真正正銘の完全消滅を見届け、クウガ
は力無く、大の字になって寝転ぶ。

『終わった…な…』

- …戦いが終わった、それを実感しつつ青空を仰ぐクウガ…。

「…先生…。」

『…どうした…。』

- クウガは未来の声に気づき、重傷の身体を鞭打たせながら立ち上がり、驚きの言葉を言った。

『「未来」…っで、いいんだよな？ 鈴原の下の名前…いつまでも名字ばっかじゃ堅苦しいしな…。』

「え？ ええッ！？ あ…あう…！？？」

- いきなり下の名前を呼ばれるとは全くの予想外だったため、未来は顔を赤らめ、可愛らしくうろたえる。

『…んで？ 何か用か？』

- 優しい穏やかな声でクウガは彼女の顔を見つめ、返事を待つ…。

「…抱き着いて…いいですか？」

- 心配に心配を重ね、彼女は涙ぐんだ潤む瞳でクウガを見つめ、そ

う尋ねた、返事はもちろん…。

「おいで。」

「…!!」

最後の最後で変身が解けて、最高の笑顔を見せ、両腕を広げ、未来を抱き締めるために受け止める体勢を取った…その時、全く予期せぬハプニングが起きてしまった。

「今だ！かかれー!!」

「容疑者確保ー!!」

「うばおおおおお!？」

「先ッ生エエエエエ!？」

『え？あ？ええええええええええ!？』

…どこに待機してたやら…突然警官隊が乱入し、真護に向かってまるでル○ンでも捕まえるかの勢いで何人も飛び掛かり、詰まれた俵みたいな状態になったため、真護も未来もサラマNDERもビックリした…どうやら今までの町での騒ぎの容疑者にされらしい。

「凶器まで持ちやがって！しょっぴけ!」

「ハッ!」

…ヅノガから譲り受けたグロンギヌスピアーを見て真護の凶器（

？）として断定されてしまい、敢え無く真護は御用にされてしまう、ツノガ…最後の最後で真護に勝った（？）かもしれない…。

「なんでじゃああああああああああアアアアアアアアアアアアッ！？」

-…哀れ、このグロンギ・カオティック騒動解決の一番の功労者・真護の叫びは虚しく響き、理不尽なまでに音の鳴る車バトカーに乘せられてしまった…ちなみにいつの間にか夕陽が昇ってた…。

「先生エエエエエエエエエエ！？」

-未来はただただ真っ赤な輝きを放つ夕陽にクウガのサムズアップする姿を重ねながら、太陽に吠えた…。

12・負けてたまるか・（後書き）

#12…珍しく連続投稿ということになりました

痛々しい出血・暴力・破壊描写をありったけ出してみました。特にタンクローリー…そしてロードローラー…どう見てもジョ。ヨですね（汗）

ストレートな殴り合いで血を出しまくりなのはシンプルでむしろ大好きで決着には相応しいと思い、メタメタにやらかし、トドメにはフォームが次々パワーダウンしていく最後のキックに気合いを入れました

ツノガのトライデント『グロンギヌススピア』、名前はホビーの『カードウォリアー駆斗戦士仮面ライダーズ』のクウガの必殺技から取りました

えー…最後は…シリアスに決める見せ場をギャグにしました（オイ、コラ作者）、あんな騒ぎを起こしたら疑われても不思議はないですね
次回でこの小説は最終話になります…しかし、ただ終わるだけではありません、その詳細はその時に…

それでは、柳雨でした

END・真に護る者・（前書き）

神原真護：仮面ライダークウガの戦い、堂々完結！

END - 真に護る者 -

- 海王・ツノガ率いるグロンギ、そして宇宙からやって来た侵略者・カオティックとの死闘・血戦、そしてまさかの真護逮捕というハプニングから約一週間経った頃…。

- 統率者を失ったグロンギ達は自らの存在意義をも失い全員土に還り、カオティック達も地球侵略からほぼ完全に手を引いた様である。

(いや)…さすがに逮捕された時は焦ったぜ、ハハツ…。

- 戦いの激しさを物語る傷痕を隠す様に覆う包帯が未だ取れてなかった、尚、生徒達にはもの凄く心配されてしまったが、『事故に遭ったが気合いで何とかなる!!』などという目茶苦茶な言い訳をして堂々と今まで通りに学校に来ていた。

- そして、真護は複雑な顔つきで苦笑いし、逮捕された時のことを思い出しながらビートチェイサーを走らせる…。

- 以下、回想…。

- 一週間前の決着後、留置所にて。

「こんなん有りかよ…。」

- 重傷を負ったこともあり、一応手当てはされたがやはり留置所送りは避けられなかった…度重なる戦いで蓄積した疲労や痛みがドツと押し寄せたため真護は最早鉄格子を掴んで『オレは無実だ! サッサと出しやがれッ!!』…などと叫ぶ元気すらなく、牢の片隅で

体育座りで大人しくしていた。

「…っつーか、この年齢^{トシ}でまさか『また』ブチ込まれるハメになるなんて…無エーわ、これ…。」

・中学・高校の荒れた青春時代：警察すらも恐れぬ暴走・暴力行為が災いし、真護は少年院や留置所に何度もお世話になった経験があるが、今回の自分の生徒である未来の目の前での逮捕が一番堪えたという…あの時の自分というよりも太陽に吠えた未来の顔が未だに忘れられないでいた。

『真護さん、大丈夫ですか？ 気にしない方がいいですよ、ヒーローにはよくあることです。』

「うええ…よくあつてたまるか。」

・ここでふと、これまでのカオティックやグロンギとの戦いをサポートしてくれた宇宙人からのテレパシーが入り、真護はそれに返事を返した。

『現在我々の方で警察関係の情報と記憶の操作中です、終わったらコッソリ助けますからもうしばらくガマンを。』

「…なるべく早く頼むぞ…。」

・どうやら宇宙人達は自分達の情報・記憶操作によって真護の『事件の容疑者という事実』を消し去ってくれるらしい、真護は内心『宇宙人スゲー』と改めて感心していた。

『なあと、我々の調査対象である地球の危機を救ってくれたアナタ

に対する感謝の気持ちです、これくらいさせてくださいよ♪」

「フツ… ああ、ありがとな。」

・宇宙人は調査対象の地球を救ってくれたことへの感謝を述べて今度は自分達が真護を助ける番であることを悟りこうして必死に情報操作に回ってる。

・最初こそは彼らの存在に驚いたが、よくよく話せばイイ奴らである…宇宙人全てが悪い奴ばかりとは限らないことが真護としては嬉しく、素直に礼を言う。

『…あ、言うの忘れてましたが…この声は真護さんだけにしか聞こえないテレパシーですから、私と普通に会話してもそっち側だと真護さんがちよつとアレな独り言してる様にしか見えませんよ？いや…かなりアレですね…。』

「…今、なんと!？」

・…宇宙人の忠告で今の自分がどんな状態か気づいたが、時既に遅し…。

「にーちゃんも苦労してんだなー頑張れよ。」

「うばおおおおお!!」

「そこ!うるさいぞ!!」

・向かいの牢に入ってるヒゲ面のオッサンになんか心配されてしまい、真護は恥ずかしさと後悔から、警官の注意も気にせずに叫びを

上げてしまった。

- …その後、深夜頃、ようやく情報操作が終わり、迎えに来てくれた宇宙人の手引きで牢を抜け出せたという…。

- 回想終了。

「いやはや…アレはな…うん、確かにオレはアレな奴だな…ハア…。」

- 溜め息をすると幸せが逃げるといふが幸せなんてとつくの昔にいくらでも裸足で逃げまくってる…。

「…今日で『お別れ』…か…。」

- ポツリと、浮かない顔で言い漏らす…。

- 三週間、何気ない日常や戦いの日々を経てあつという間に三週間経ってしまったのだ。

- 真護は教師といっても臨時教員、今担当している5年2組も本来ならば麻生真尋が担当してたはずだったが、彼女が不慮の事故に遭い入院…真護はその間に彼女の代わりを勤めてたに過ぎない…。

- 思えば臨時教員としての期間である三週間…色んな出会いをしたものだ。

- 自信が無く、不安を持ってた真護を優しく、勇気付けてくれた麻生真尋。

- 物凄いテンション高く騒がしい元気がとりえな一条望。

- 内気な恥ずかしがり屋で読者と動物が好きな犬神雅。

- …後、高浜とかいう異様なオーラを放つオカルトな女子や近藤学なるアイドルのおっかけだかいた様な気がするが真護の頭には彼らの存在が既に忘却の彼方へと消え去ってる。

- 本来ならば接触はおろか協力すらしないだろう地球人である自分にあらゆる面でのサポートに徹してくれた宇宙人達。

- 生意気ながらもなんだかんだで口喧嘩を交わしながらいつの間にか仲よくなったサラマンドー。

- そして…幼いながらも真護と同じく、人知れず異形と戦い、互いに正体がバレ…そして昔の過ちを知ってしまったにも関わらず、闇に沈みゆく彼に手を差し延べ、助けてくれた少女・鈴原未来。

「フツ…さあ、最後の授業だッ!!」

- 真護はバイクのアクセルを全開にし、もうじきお別れともなる愛すべき生徒達が待つ教室へと走り出した。

- 桃月小学校・5年2組。

「皆さん、長い間御迷惑をおかけしました、麻生真尋、無事退院です」

「わー!!」

「先生久しぶり〜!!」

・教室には無事退院出来た本来の担任・真尋が朗らかな笑みで自分の復帰を祝ってくれる生徒達と楽しく触れ合っていた。

（うんうん、やっぱりこのクラスの担任は麻生先生であるべきだ…ま、役目を終えたオレは静かに去るのみだな…。）

・少し寂しくあるが仕方ない…真護はこれでいいと言わんばかりに腕を組みながら頷いた。

「あの、神原先生…私がない間、この子達と一緒に居てくださって、ありがとうございます」

「あ、いや、その…オレはそんな大したことは…。」

「いいえ…。」

・謙遜する真護に対し、真尋は彼の言葉を遮る様に言葉を紡ぐ。

「私この子達からたくさん神原先生のお話を聞きました、授業はもちろん子供達一人一人のことを大切に、楽しく接していただきまして…本当にありがとうございます。」

「あ、麻生先生…こちらこそ、ほんの少しの間でしたが、生徒達との時間、ありがとうございます。」

・二人は互いに頭を下げ、今までのことで世話になったことの礼を言う。

「神原先生…。」

「そうか…今日でもう…。」

・途端に先程まで明るかった生徒達全員の表情が暗くなる…時には優しく、時には生徒達と一緒にバカやったりもしてたが真護もまた、短期間ながらも彼らから愛される存在となっていたのだ。

「先生…あのさ…。」

「あうっ…。」

「ん？どうした？」

・比較的明るいはずの望、そして元々泣き虫な面もある雅はやはり他の生徒同様に暗い顔だった…。

「…これでさよならなの…？」

「お別れなんて…やだよ…。」

・今にも泣き出しそうな顔になりかけてたため、真護は二人の気持ちを汲み取り…。

「…ふう…ちょっと来い、望、雅。」

「「ふえ！？」」

・いきなり真護は二人を下の名前で呼び、驚く暇も与えない内にワシワシと頭を撫で始めた。

「…つたく、『お別れ』だの『さよなら』だの言ったってーの、もう会えないみたいでなんか切ないだろが、こういう時は『また会えますか?』だろ?会えるって」

「先生…?」

「あ…あの…?」

・真護は二人の不安を消す様に飛びつきりの笑顔を見せながら、顔を赤らめる二人の困惑すら介さずにまだ撫でてる。

「望、お前は元氣過ぎるからもう少しおしとやかにな、でないと男にモテないぜ?」

「んなあツ!?!」

「雅、お前は少しずつでいいから積極的になろうな、麻生先生でも未来でも望でもいいから人とお話し出来るように、な?」

「は、はい…。」

・真護は悪戯が成功したみたいな感じに冗談混じりながらも二人にこれからの課題を告げてようやく離れる。

「未来。」

「…先生。」

- 真護の体温を感じ取りながら、未来は彼に会えた、未来の小さな身体を包みながら、真護は彼女に会えた運命に改めて感謝した。

「いつかまた… また会いましょう、先生！」

「… ああ！」

- 二人に涙はない、しばしの別れ、また会えると約束したのならば湿っぽいのは似合わないだろうと思い、笑顔で同時にサムズアップした… きつと必ず、またみんなに会えると信じて…。

「… 先生！！」「」

- 放課後、真護はビートチエイサーに跨がり、生徒達の名残惜しい別れの声に振り返らずにサムズアップした手を掲げながらそれに応えた、彼から言葉は無い、これは本当の別れではないからだ。

- 夕方になりかけてる青とオレンジが入り混じった空を眺め、次の『目的地（赴任先）』の名を呟き、アクセルをかけ、桃月小学校とたくさん生徒達をバックに走り去ろうとしていた…。

「次は… 『桃月学園』だ！」

- 心に深い闇を抱えながらも、人々の笑顔を真に護る男・神原真護… またの名を仮面ライダークウガ、待ってるものは新たな出会いか？ 戦いか？

- … 完。

・ブチ切れた真護は怒り狂いながら望にお仕置きすべく、バイクから飛び降りて学校に逆戻り、あまりの恐さに生徒達全員が本気で泣き叫びながら命懸けの鬼ごっこへと発展してしまったという…。

『何やってんだか…。』

『全くですね…。』

・遠くでそんなバカやってる様子をお茶を啜りながらサラマンダーと宇宙人は呆れながら眺めてたという…。

・『MASKED RIDER・S PEACH MOON ST
ORY ANOTHER・空我・』…今度こそ、完！

END・真に護る者・（後書き）

最終話：思えばここまで辿り着くのが長かった（泣）スランプややらず終いを何度も繰り越してきましたが最後まで書き通すことが出来ました！（しかしグダグダ気味かも…）

留置所：真護には古巣にも等しい後ろめたい場所、宇宙人の手回しでなんとか容疑者の汚名返上はできました：代わりにテレパシーとの会話のせいで変な目で見られましたが（汗）

私自身湿っぱいお別れってあまり好きじゃないです、『さよなら』で済ませる別れなんて切ないだけですから『また会おう』とか『またね』とかいつか再会出来る様な別れの挨拶の方にしました

さて、真護が最後に語った新たな赴任先『桃月学園』、私のもう一つの連載作品『MASKED RIDER・S PEACH MON STORY』の舞台になっております、そして本作『空我』はその番外編として今まで書いてきました：これがどういうことか？という、あっちも放置気味でいつまた再開させるかわかりませんが『MASKED RIDER・S PEACH MON STORY』に真護をいつか登場させたいと思います、元々終わったらそうするつもりだったのですが終わらせるのがかなり遅くなり先送りに（またなるかも…）になりましたが登場をお楽しみに

しかし最後の最後での望のブチ壊し発言は完全にやり過ぎましたね（汗）最後まで湿っぱいのはと思いやらかしてしまいました

最後まで御覧なって頂いた読者の皆様、本当にありがとうございました、またどこかでお会い致しましょう！

それでは！柳雨でした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4700i/>

MASKED RIDER'S PEACH MOON STORY ANOTHER -空我-

2010年10月20日20時11分発行